き、有様なれは高直は、物語を又他へ移し、暫く休み別を告げ、我住む方へぞ歸りける。小毬よりは雁金が、疎々しくて過ぎぬるを、常々恨み聞ゆれども、斯く高直の言ひつる後は、愈慎み彼處へ行かず、是は若し冠者の君が、來し合はする事もやと、心配をしてなるべし。扨高直は不束なる、堅田を今更持てあぐみ、嗚呼如何せん賢立てに、由なき者を呼び迎へ、世の人兎角に譏るの由、さればとて復近江へ、歸しやらんも輕々しく、物に狂ふに似たらんか、左ありて此儘据ゑ置かば、愛に溺れて彼をさへ、實大事に傅くかと、人の笑ふも腹立たし。富世の前の御側へ、差出しなば祕藏して、籠め置く抔の噂は止まん、見し事もなく推量に、不具のやうに言ひ下せど、姿容は左のみ見苦しからぬも、夫にて自然にあらはるべしと、或時に富世の前の、御側近く罷り出で、云々の由を述べ、「見苦しからん事などは、老いたる女中に心得させ、憚る事なく教へ諭し、言ひ懲らさせ給ふべし。御腰元の若き者に、笑はせて給はりそ、輕佻として落着かず、世に詮方なき育ぞ」と打笑ひつゝ高直が、聞え上ぐれば富世の前、しとやかに會釋あり。左程の事にはよもあるまじ、兄弟共や召使が、見ぬ前からして優美なの、御發明でと言ひ騷ぐを、聞いた後に逢ふた故、彼樣ではない筈と、見ゆるのは親の慾目、彼方では又知らぬ人の、中に交りて心も臆し、言ひ出る言葉も後や先、夫故輕佻するやうに、思ふで



あらう」と恥しげに、聞え給へる御有樣、いと麗しく見え乍ら、細やかにはなかしげなく、只懶しき樣添ひたり。譬へて云はゞ面白き、梅の花の半程、開き掛りし朝朗、殘り多かる風情したり。さは云へ知らぬ姉妹に逢ふを嬉しと思しけん、微笑給へる愛敬は、又世の人には似給はず。高直は吐息を隱し、「御察しあられし通り、人尋常の女ぞと、柏之助が聞き出し、某にも深く包み、預け置いたる近江へ人を、下して名乘り出る樣、取り計ひしと後にて噂、若き者の爲る事は、締なき者に候」など、云ふも堅田の身に取りては、賴母しからぬ事なりけり。斯くて其儘高直は、御前を引き下り、館へ歸り堅田を住する、部屋の戸口に密に彳み、内の體を覗き見れば、簾高く押し張りて、お節と云へる腰元女と、おりはを振つて遊び居たるが、勝に乘りしか聲高く、「貴方が振つたは五四〳〵と、泣くは深山の郭公、私しのはそれ連や、志賀の都でサア措きな、今度も續けて、さつと散れ、夫れ山櫻山櫻」と、云ふ聲ぞ甚舌早き、あな憂てやと高直は、供に連れたる近習の者も、返しやりて猶障子の、隙間より覗して覗ひ居る。此お節は近江より、連れ來りし女にて、此處の館の腰元は、行儀正しく氣詰ゆゑ、堅田は兎角彼のみを、相手とすればお節も亦、元より心安だてにて、主とも思はず負色に、なりたるに氣を急込みて「えゝ、重目が出腐つて、亂離にされた返報に、今度は何ぞ」と筒取り上げ、捻りながら

に早くも振らず、「何が出様か斯う持つて、居るうちが樂しみな」と、甘えて言へば堅田は手を、押揉み押揉み、「小さい目が、出まして何にも無い處」と、餘念もなげなる其姿、土氣は拔けれど愛敬は、流石にありて黑髮の、麗しきにて餘の難は、隱し乍らに額は猫の、顏の如くにいと狹く、物云ふ聲の調子に外れ、早言なるぞ瑕瑾なりける。此處ぞ宜しと取り立てゝ、いふにはあられど高直も、鏡に映す我顏と、思ひ比べて見る時は、子に非じとは爭ひ難く、これも宿世の約束ならんと、思ひ〳〵内に入り、「知らぬ人の中に交り、打ち籠りてのみおはすれば、嘸初々しく思ふべし、我も何かと事繁く、此頃は尋ねず」と、云へば堅田は例の舌早、「斯うして居れば何事も、物思ひは侍らず、併し年頃懷しかつた、お顏を毎日見ぬ計りは、二六で片目下されぬ。樣な心地でござります」と、投首すれば高直點頭き、「身近く使ふ女の中に、はか〳〵しきも無き間、夫れにしておき見習はせんと、豫々は思ひしかど、まさかにさうも爲し難し、總て人に使はるゝ、女は氏のあるも無きも、皆一列に打ち交しれば、些細な事に目も耳も、留める者にて心安し、さは言ひながら夫れだにも、些人がましき者の娘は、彼は誰が子と自ら、知られて親や兄弟の、恥となる事無きにも非ず、況て御身は某が」と、不圖云ひ掛けて我が位の、貴きを誇る樣なれば、言葉を止め恥しき、景色も知らず堅田は摺り寄り。「夫は立派にお側へ出



る、人と肩を並べる氣なら、心配もあらうけれど、手洗所の掃き拭ひ、そんな事して奉公を、爲るには氣骨も折れはせぬ」と、云へば高直堪へ兼れ、聲を出して打ち笑ひ、「夫は餘りに赤松の、息女の身には似合ぬ役、偶々逢ひし此親に、孝行せんの心あらば、其物言ひを今少し。長閑めて聞かせ給へかし、然あらば命も延びなん」と、打ち戲れて聞ゆれば、堅田は頭打ち振りて、「此の舌の喋々するは、性質にこそ侍らめ、私のぐつと小さい時から、母樣も之を氣にして、嗚呼滅多な事はせぬ者ぢや、其方を生んだ其時に、何うぞ達者に育つやうにと、妙法寺の別當とて、尊いお方を產所へ迎へ、お經を上げて貰ふたが、夫は〳〵口早に、たつ〳〵と讀まれたに、肖かつた者であらうと、御苦勞に被成ました。今更爲やう樣は無い」と、暫時案じて氣を取り直し、「併し彼方もそれほどに、被仰ますれば何かして、此の舌早を止めませう」と、俄に騷ぐに孝行の、心の深きは顯れて、高直は哀れと見やり「產屋近く入り立ちたる、其尊き法師こそ、思ひ掛けなき恨みを受けし、大藏經とて有り難き、經を前世に讖りし罪の、報により此世にて、啞と吃と生るゝとか、何事もこれ前の世の、約束なりと云ひつゝも、心の中に室町の、內君とても實は我が、娘乍らに御位、自然と備はり給ふなるに、斯くの如くに浮々する、堅田が樣子を見せ申さんは、いと恥しき事にてあり。抑彼が斯く怪しき、樣子をよくも聞き定

めず、迎へたるこそ過なれ、數多の人の目に觸れなば、言ひつぎ見つぎいよ〳〵噂を、言ひ散らさんとつおいつ、思へど流石に棄て難く、「折に觸れては富世の前、我が此館へ渡り給ふ、其の時なんどはお前に出で、人の有樣見習はれよ、さまでに賢からざる者も、左樣な方に交らへば、自然と座作進退、溫良やかになるものなり。彼舌早を愼しみて、仕ふまつらん心なら、館へお出でを待つにも及ばず、室町御所へ差し上げん、如何に覺ぼす」と問ひければ、「夫は嬉しき事にこそ、其樣お方と一列に、なつて居るのを寢ても覺めても、年頃願うて居りました、內君樣が御許しなされ、呼んでだに下さらば、水を汲まして戴いても、御奉公をしませう」と、快げなる有樣にて、前よりは猶早言に、囀りければ云ひたりとて、詮なき事と叱りもせず、「否さ何も下立ちて、菜を摘み薪を拾はずとも、溫良やかにお側へ出よ、只彼の其方を肖からせた、法師が遠くて殘念な」と、戯れ事にいひ做せど、堅田は更に心も付かず。抑此の高直は、國司の其の中にも、御覺いと愛度、器量勝れて物々し、されば尋常の武士なんど、うち對ひては物だにも、言ひ惡き景色なるも、見知らればいと馴れ〳〵しく、「扨いつか內君殿へ、參りませうと不圖問へば」、高直は座を起ちながら、「宜しき日などを撰んで後、よし又夫も煩はしと、思はゞ今日にも參るが宜い」と言ひ棄て興の覺めたる體に、部屋を立ち出る其折柄、近習



の武士大勢來り、「室町御所より急の御召、これより直に御出仕かと、御服を持參致せし」と、差し置けば高直は、直に着換へて打ち圍まれ、歸り行く其の勢の、いと嚴しきを堅田は見送り、「さても立派な我が父御や、其の胤ながらむさくろしい、小家で何故に育つたやら」と、云へばお節はくつ〳〵笑ひ、「餘り大層過ぎるので、お側に御座るも恥しさう、とてもの事なら常體で、貴孃に似合の親御があつて、夫れが大事になされた方が、よささうに思はれます」と、聞いて堅田は目に稜立て、「人の言葉を言ひ貶す、又例の差出者、今までとは違ふぞよ、是からは最早私と、一處に口をきゝやんな、大層過ぎても呼び取つて、下さる譯があればこそ、お呼迎へなされたのぢや」と、いと腹立たしき顏付は、浮世に馴れて愛敬あり。打解姿の浮々せしも、亦見處の無きには非ず、喧いと田舍び怪しき下人の、中に成長たりければ、物云ふ術を知らざるなり。總じて人は詞遣に、心を注くべき事にてあり、何の譯なき物語も、長閑に押鎭め、言ひ出したるは聞く人も、珍しき樣に覺え、面白からぬ歌にもあれ、まづ圓滑に打ち吟じ、扨其歌の意など、解くにも言葉多からず、殘り惜しく思はせしは、自然と耳に止るかし。此堅田の如くにては、假令由ある心の深き、事を云ふとも宜しき筋を、聞き分くるものあるべからず、取締めもなき聲音にて、言ひ出づる事ざこちなく、言葉訛りて田舍の乳母の、懷に居て習ひ

し樣子の、今に失せぬぞ瑕瑾なるべき、さは云へ歌は三十一字、發句は五七五文字の、數を知らざる程には無けれど、我儘に綴る故、本末さらに打ち合はず、何か案じて居たりしが、硯取り出し、獨語、「さて内君殿へ參れよと、言はれたを棄て置いて、遲うなつたら不得已に、來たのであらうと思はれう、併し父御が又と世に、無い程私を大事にして、下さつたとて行先に、構うてくれる者が無いゝ、御所とやらには居堪れぬ、今は内君殿にもせよ、元姉妹の事なれば、文を進ぜて樣子を見やう」と、墨摺り流し是も亦、薄雪双紙錦木にて、覺えし古歌の詞を夫れ彼、思ひ出して書きたりしが、歌を詠まんも難しく、ふと天狗俳諧と、云へる事を思ひ出し、歌書取り出し其方の五文字、此方の七文字圖にして、一つ開き二つ明け、段々に書き續け、三十一文字に爲たりけり。(此處の事は暫時置き、室町の事を云ふべし)。其の夕暮の事なりけん、富世の前は腰元引きつれ、庭に遊びておはしゝ折から、瞿麥の花に結びし、文を中垣持ち參り「お下婢めきたる風俗ながら、清げなるまだ淸き女、赤松の館より、御使の由を述べ、内君樣へ御直に、已れ參らせ給へとて、新參りで勝手を知らぬが、御茶の間へ差出す、恰度其處へ當吉が、久し振りで私へ、逢ひに參つて居つた故、誰殿へ仕へるお人ぢやと、承りましたれば、堅田樣とて近江から、お迎なされ館では、今姫君といふお方に、お付き申して來た女、見



知りごしにて物言ふた、事は無いと申す事、御文の參るべき、御心當りも侍るや」と、細く小さく卷き結びし、文引きほどき御覽ぜさす、内君は點頭給ひ、「其近江より迎へし娘を、妾が側へ差出したいの、噂は最前聞き置いた、まづ文とは殊勝らしい」と、牀几に休らひ見給ふ文章。「蘆垣の間近き程に住みながら、御後影をも拜まぬは、勿來の關をや据ゑられけん、憚り多くも武藏野の、由緣といふは穴賢や穴賢や」と計り書き、返すがへすに、「今宵にも參りたう侍るなり。五月蠅き者と思す程、生憎に墓はしゝ、折れても切れぬ蓮根の絲筋より」とて偖歌あり、「草若み常陸の海のいかが崎いかで逢ひ見ん田子の浦涙」角々しき手に假名とも字とも見分け難きが打交り、のの字は圓くしの字は長く、能手めかして書いたる行は、更に揃はず風の强き、雨の脚ほど横斜、倒れぬべく見えければ、打微笑みて側へ置き、「其方の處へ當吉が」と、問はせ給へば中垣手を突き、「お使の歸りと申して」、「久し振で妾も逢ひたい、まだ居やるなら是へと云や」と、のたまふ御側に吳竹が、いと近う侍ひしが、文の端々差覗き、「今樣めかしき御文章、殊にお歌の珍らしさ、いかゞ崎とは近江の名所、田子は駿河常陸を合せ、三國一の名歌ぢやと、よもや主人の姉妹とは、思ひもよらず若き人々、諸共聲立て打ち笑ふ。富世の前押鎭め、「假名も知らず本末も、無く見ゆれどゝ是れは是れ、古歌を集めて我心の、中を知らせしものならん。實

は妾が近しき由縁、草若みとは伊勢物語の、寢よげにもゆる若草を、含みて同胞なるを云ひ、其次の句は常陸なる、いかごが崎の忘貝、拾ふ甲斐なき物にもある哉、元眞集に確見えた、假令取り上げ給ひても、甲斐なき我身といふ心、近江で育つた者故に、いかごが崎をいかが崎と、覺え違ひか書き過ちか、此結句の七文字は、誰々も知る古今の歌、田子の浦波立たぬ日は、あれども君を戀ひぬ日は無し、妾を絶えず思ふといふ、道理は聞えてある」と、先方の心は知られども、さもありさうに言ひ黑め、「文も大方歌詞、唯安らかな返書では、輕々しう思うであらう、似合しげに認めて」と、仰せに奚竹なほ繰り返し、「歌の詞が縺れ合ひ、此の御返書は聞え難し、殊に仰書めいたら、本意ない事と思し召さん、たゞ御文の樣にとて、書きしを内君見給へば、「常陸なる駿河の海の須磨の浦に浪たち出でよ箱崎の松」「箱崎は筑前名所、それでは國が又一つ、殖えて餘りに戯言がましい、實に妾が歌なりと、人の言はんも恥し」と、のたまふを奚竹打ち消し、「實か虚かは聞く人の、方で存じて居ります」と、云ひつつ文を押し包み、頓て使へ差出す、互に可笑しき口調なり。堅田は此の返書を見、歌の心は分られど、立出でよとは來いとの事、松とは待つと云ふ事と、大凡に合點して、甘たるき彼薫物を、返すがへすも焚き染めつゝ、はうべき赤く搔い付けて、髪を取結げ裝ひし、其の樣子は賑しく、愛敬はあるものか



ら、都の人とは思はれず、室町へ參りなば、差出がましき事もあらんか、（常夏の巻終、篝火の巻に移る。）此頃の人毎に、女の容の田舍びたる、又は言葉の訛りしを、見聞く毎に赤松の、今姫君の樣なりと、惡なき口に云ひ散らすを、光氏は聞し召し、今迄更に人知らず、籠り居たらん其娘を、物々しげに召し出し、斯くまで人に善からぬ噂を、云はるゝこそは心得れ、我娘とだに云ふ時は、容の美醜賢きにも、愚なるにも關らず、都の中には侮るべき、人はあらじと高直が、心に誇り權威を恃み、深くは彼が人と爲りし、樣子をも尋ねず持出でゝ、今更己が心にも、適はぬ故に自ら斯く、はした無く言はるゝなるべし。假令ば何程愚しき、女なりとも待遇やうで、斯う惡樣には云はれまじ、嘸高直は後悔せん」と、事の序に山吹に、物語り給ひければ、山吹よりして玉葛も、此の仰を傳へ聞き、親と云ふのを賴みにし、我身も彼處へ初より、行きなば斯かる恥辱がましき、事のあらんを思ひも掛けぬ、惠に預り後指、人にさゝれぬ有難さを、愈思ひ知りにけり。

秋にもなりぬ、初風涼しく吹き出でゝ、單衣の衣の裏淋しき、心地なしつゝ光氏は、玉葛を屢訪ひ、琴など敎へ遊び暮す、五日六日の頃なりけん。夕月は疾く入りて、涼しく曇れる空の氣色、荻の葉を渡る風の音も、次第に哀れなるに、光氏は又例の、玉葛が住居へ行き、琴を枕に臥し居たるが、斯く

打ち解けて夜を更さば、人の怪しと咎めんかと、歸らんと爲しける時、不圖庭を打ち見るに、焚き棄てたりし篝火の、少し消え方なりければ、山吹袖の香二人を呼び出し、差圖をしつゝ燈點けさす、此庭にはいと清き、遣水ありて其邊に、氣色殊に廣ごり臥したる、大きなる檀の木あり。其下に篝の臺を、据ゑ置きて焚くべき木を、折りては打ち入れ打ち入るゝ、故にこれを折松と、名づけて竿に釣りて焚く、篝火とは又異なり、二人の女はよく心得、炎の左迄に烈しからぬ、程を測りて焚上げたるが、光氏の居る所とは、其間遙に隔てしかば、打ち眺るもいと涼しく、なかしき程なる光に不圖、玉葛が樣子を見れば、手に觸らば冷ならん、前髪は額に垂れ、鬢も亂げて散りながら、衣紋は深く搔き合せ、衣の着樣は打ち解けず、裳の亂れ取り集め、つゝましげに思したる、氣色はいとゞ麗しゝ。歸り憂や思ひけん、光氏は立ち休らひ、「絶えず庭に人を置き、篝の消えぬやうにせよ、夏は更なり秋とても、暑き程の月なき頃、庭に光の見えざるは、物淋しげにて風情なし」と、云ひつゝ案ずる氣色も無く、「散らすなよ戀の烟を初嵐」と言ひ流し給ひければ、玉葛は愈怪しの、御有樣ぞと深く恥らひ、「露に消せ篝と共に仇し名も、」人の何とか思はんかと、心苦しき樣子なれば、然らばと許り言ひ棄てゝ、立出給へど玉葛は、暫時と云ひて止めもせず、御見送もそこ〳〵に、一間の中へ引き入れけり。折もこそあ



れ東の、高樓の簾の中に、琴に笛を面白く、吹き合せしが聞えけり。是は彼の氏仲が、常々に參り馴れし、高直が兒等と、今宵も遊び給ふなりけり。光氏は耳を欹て、「雲井之丞はまだ寢ぬな」と、云ひつつ後を顧みて、「オ、袖の香夫に居るな、彼方へ參つて申さうは、いと影涼しき篝火に、引き留められつつ思はずも、これに在る由告げ知らせよ」「畏り侍る」と、直に起ち行く袖の香と、打連れ立ちて氏仲の、供には例の柏之助、梅之丞も引添うて、頓て此方へ出で來れり。光氏は三人を、傍なる座敷に伴ひ、「秋は殊更物寂しき、風の音なひ笛竹の、音色床しく聞きなして、更くるも厭はず迎へたり。誰そあるか琴持て」と、甚慢しく彈き給へば、氏仲も取敢ず、面白く笛吹きたり。光氏殆興に入り、謠へ謠へとのたまひても、柏之助は一間にて、彼の玉葛が聞かんかと、其方に心配して、逡巡して聲を出さず。「遲し遲し」とありければ、梅之丞が忍びやかに、謠ひ出でたる聲細く、鈴蟲に紛ひたり。二唄ばかり謠はせて、琴をば柏之助に讓り。「簾の中には物の音を、よく聞き分くる人もあらん、其心して彈くべし」と、仰に恐れ入りながら、唄も謠はず又琴をも、辭しなば御意に違はんかと、詮方なくて搔き鳴らす、實に高直が爪音に、をさ〳〵劣らず華やかに、面白くこそ聞えけれ。山吹は盃を、持て出て勸むれど、光氏は手にも取らず、「はや我が如く盛の過ぎし、人は酒は飲むだにも、心得なくては過

失あり、深く醉へば其の序に、今迄包み匿くせし事も、浮と言ひ出す事のあり。末には知らする事ながら、まだ早しまだ早し」と、打ち笑ひつゝ宣ふを、玉葛は一間にて、實に哀れと聞き居たり。吁疑も無き兄弟の、絶えせぬ中の契り故、疎略ならず目に耳に、留めて深く思ふとは、夢にも知らぬ柏之助、心の限り盡しても、此姫をこそ吾が妻にと、思ひ絶えれば近付きし、斯る序を幸と、胸は躍れど是も亦、思慮ある性質なりければ、更に行儀を打ち亂さず、琴さへも打解けては、彈かずに慎み居たりけり。（篝火の巻終。）

（野分の巻）坤の館の庭へ、秋草を植ゑし事、去年より今年は見處多く、種々の數を盡し、或は竹或は柴の、芭蕉を結ひ交ぜつゝ、何所にもある花なれども、枝ざし姿しほらしく、所柄にや朝夕の、露も玉かと輝きて、造り渡せる野邊の色、打ち詠むれば櫻咲き、春の山さへ忘られて、いと凉しく面白く心も浮立つやうなりけり。彼の巽の花園に、心を寄せし人々も、亦引き返し此の景色を、愛でつゝ騒ぐは移りゆく、世の人心の樣に似たり。礒菜は此花に見惚れ、久しく此處に逗留し、昨日に今日は色增るを、打ち眺めて暮しゝが、常の年より野分の風、いと恐しく空の色、變りて颯と吹き出でぬ。花の凋るゝ事なんどは、心も付かぬ人さへも、あら憫然き事なりと、心の騒ぐ程なるに、況てや見る



見る叢の、露の玉の緒亂るゝばかり、心惑ひもしぬべく覺え、礒菜は深く打ち歎き、彼の古歌に大空を、覆ふばかりの袖もがなと、願ひしは春、これは秋の、風にも思ひ出でられて、甲斐なき事を打歎き、暮れ行くまゝに物も見えず、雨戸など繰りぬれど、花の上のみ案じ詫び、其夜は更に眠られぬなるべし。巽の館も前栽を繕はせ給ひける、折にしも斯く風騒ぎ、芒は折れ荻は翻れ、露も溜らず吹き散らすを、紫は端近に、打見遣りておはする時、氏仲は不圖來懸り、小障子の開きたる上より、何心なく差覗けば、腰元女數多居たり。紫の上のおはする、邊近くは憚るべしと、平常父ののたまひければ、少し後へ引き下り、音もせで伺ふに、屏風も風に吹き倒され、押疊みて片寄せたれば、あらはに彼處の見通さる、腰元女も清げなる、姿なれども紛るべくも、あらず氣高く愛敬は、匂ひ翻れて櫻櫻、霞い間より咲出でしを、見る心地して打ち向へば、彼方の匂の我が顏にも、移るべくぞ思はれける。世に珍らしき御樣子と、打ち眺めて佇立しが、風は愈烈しくて、簾を吹き上げなどするを、抑へんとして腰元女の、打倒けたるか音するを、あら危なやと振返り、少し笑ひ給へるが、珠更にいみじう見ゆ。此の紫も草花の、皆凋るゝが心憂く、見棄てても入り給はず。さて光氏は先により、明石姫を打ち案じ、彼方へ行きて居たりしが、今遽しく立ち歸る樣子に驚き氏仲は、立ち隱るれば夫れとも知

らず、光氏は座敷に入り、「さて遽しき風にてあり、皆雨戸をば鎖堅めよ、斯る折には男共も、垣のあふつを防がんと、庭先近く立入るべし。餘りに是は現ぞ」と、聞え給ふを又立寄り、氏仲は打見るに、何事やらん密々と、紫に物語り、打微笑み給ふ樣、花と花との盛の姿、親とも覺えず若やかなり。又一落し風荒れて、其所らの障子を吹き放ち、閉てる所も次第々々に、現になれば彼方より、見えもせんかと恐しく、氏仲は立退きて、板緣を打ち回り、今來る樣に聲作るを、光氏は聞き耳立て、「されば こそ男あれ」と、女共を奥へ遠ざけ、誰にかあらんと立ち出で給ふ、此方に氏仲手をつかへ、「嚴を吹揚ぐべき、風の烈しさ御機嫌の程、如何にかと心に掛り、伺ひに參りたり、今日の風は艮の、方より吹けば此の御殿は、他所に比べてまだ長閑し、北の方の樓は、いと危げに見ゆるとて、騷ぎ罵り候ふ」と聞いて光氏、「さもあらん、夫は差置き御身は今迄、何處に居たる」と問ひ給へば、「私事は赤松の、館に晝より侍ひしが、風甚く吹きぬべしと、人々申しつる間、覺束なさに夫れよりこれへ、今は歸りて小毬は、小さき子どもの樣になり、僅の事にも怖ぢぬれば、況てや烈しき風の音、嘸かし心細かるべし、お暇願ひて又彼所へ參りなん」と聞ゆるにぞ、光氏は打點頭、「夫々早う行くが宜い、年老いて又若うなるを、脇目に見ては打笑へど、これ定まりし老の癖、小毬に申さうは、斯く騷しきに嘸心



を惱ませ給はん其事は、察しながらに氏仲に、任せて別に我よりは、訪問ぬよし傳へと」よ、哀れがりてのたまふを、畏りて直樣に、此館を立ち出でしが、野分いよ〳〵吹き募り、道の佗しさ大方ならず、前にも度々云ふ如く、孝心厚き氏仲故、事なき時も光氏と、小毬が機嫌を日毎に、尋れ給ふに況てや今日、斯る空の氣色により、風の騷ぎにおはすべき、所にはおはせずして、彼方此方と歩き給ふは、いと哀れげに見えにけり。小毬は冠者の君の、參り給ふの報知を聞き、いと嬉しくも賴母しく、待ち受けて近く請じ、「問ひ給はりしは有難けれど、お途中の程は如何なりし、若しやお供の中などに、怪我せし者はなかりしか、お駕籠が損じは致さぬか、是程年は積みたれど、まだ斯く計り騷がしき、暴風に逢ひし事はなし」と、打ち慄くを云ひ慰め、光氏ののたまひし、事抔傳ふる其中に、大きなる樹の枝なんど、折るゝ音して家根の瓦も、殘るまじう吹き散らす。今とても此館は、勢なきには非ざれど、正則の世に時めきて、光氏常に來通ひし、其時に比ぶれば、何とやらん物寂しく、今宵の如く騷しき、折なんどには心細し、高直も母の機嫌、伺はんとて入り來り、氏仲に一禮し、益々恐々しく、音する風に打惱む、母の心を慰めんと、故意と鎭り長閑やかに、物語らへば小毬は、雁金のこと云ひ出し、久しく見ぬが悲しとて、唯泣きに泣きけるにぞ、高直暫し面を垂れ、物をも云はず居たりしが、思ひ

なほして顔を上げ、「左程に思し給ふなら、遠からぬ中參らせん、彼は左に右物思はしき、樣子日に日に打ち添へし、哀へ行くも心柄、早く申さば女の子を、持つは苦勞を求むる種、家を續ぐべき男子だに、あれば無くても宜いもの」と、心解けざる氣色にて、云ふに小毬心憂く、是非早うとも聞えやらず、高直何か吐息をつき、「夫に次いで又一人、いと不肖なる娘を擧け、持惱み候ふ」と、投首する顏差覗き、「其は合點の行かぬ事、御身の實の娘なら、幸なかるべき樣はなし、假令心は足らずとも、何とて人の侮るべき、妾の知らぬ孫ならば、近江へ預けた娘であらう、今程は嘸成人、それをも雁金諸共に、逢はせ給へ」と小毬が、云へど答へず首を振り、「見苦しき事いと多し、爭でか御目に掛けらるべき」と、他の物語に移しつゝ、頓て住居へ歸りけり。氏仲は默然と、此の物語を聞き給ひ、心に可笑しと思ひながら、面には現さず、尙高直が後に殘り、小毬が寢れ兼ねるを、介抱しつゝ居たりしが、曉方に風少し、風ぎて程なく村雨の、やうにさら〳〵降り出でぬ。六條の館にて、打ち離れたる亭などは、倒れたりなど人云へば、又夫れも心元なく、早や風も止みたればと、暇を乞ひて氏仲は、歸りを急ぐ道の程、横斜雨の冷に、乘物の中へ吹き入れ、空の景色はまだ凄し。まづ花鄕が住居を訪ふに、只恐怖て一處へ、皆打ち集り居たりしかば、早や風も吹くまじなど、力を添へ氣を配り、男共を呼び出し、



先づ假に繕ふべき、處々の差圖しつ、直に巽の館へ行くに、まだ雨戸をも開け渡さず、靜りかへつて人もなし、呼出さんも煩かしと、手づから窓の障子を開き、押掛りて見渡せば、築山の木を吹き靡かし、枝ども多く折れ伏したり。草叢は更にも言はず、檜皮瓦彼方此方の、萱門枝折戸板垣竹垣、亂りがはしく成り行きて、昨日見し樣にも似ず、朝日僅に差出でたるに、いと哀れげなる庭の露、きら〳〵として空まだ暗く、霧立ち覆ひ物凄し。まづ試みに扇を鳴らし、打ち咳き給ひければ、障子の中に光氏聞き付け、「聲作りしは確に氏仲、夜はまだ明けまじなんど」とて、何か言ひつゝ起き出でゝ、屏風搔遣る音すれば、女の聲は聞えれど、紫もおはするならん、憚るべき處まで、浮々來り御機嫌に、違ひやせんと遠く退き、待てば程なく光氏は、寢衣の儘にて出來り、「如何にぞ昨夜小毬は、歡びつらん」と問ひ給へば、「仰せの通り僅なる、事に附けても涙脆く、言ひ甲斐なき某を、力となすがいと悲しと、眼の中うるめば光氏點頭、「もう久しうは此世に居まじ、心の限り忠實に、仕ふまつるが人の道、彼の高直は細やかに、心を附くる本性ならず、其事は小毬も、密に歎くと噂に聞く。抑彼が身の行爲、人に勝れて華やかに、親に仕ふまつるさへ、仰々しき事いと多く、高直は孝行者と、見聞く人を驚かさんの、心はあれど誠に染みて、深き所はあるべからず。さる故に自から母子の間に隔意あり、昔は知

らず末世には、賢き人ほど難癖は、定まりてある者なり」と、のたまひながら「夫よ〳〵、磯菜の方は此程より、逗留しておはしゝが、此方にははかゞしき、老女も側に侍ふまじ、吾も行かんが御身まづ、先へ参りて終夜、いと凄じき風の音は、如何聞し召しつらん。其の吹き亂り侍りし、時も時とて吾も亦、風の心地に打ち惱み、尋れ参らせざりしなど、取り繕ひて申すべし」と、仰を氏仲畏まり、廊下を傳ひ庭へ下り、築地の中を回りつゝ、彼所へ赴き東の、廣間の南の小門に立ち、磯菜の方の住ませ給ふ、座敷を遙々見渡せば、雨戸を處々開き、まだ仄なる朝朗、簾を捲いて人々居たり。欄干にも押掛りて、若やかなるが數多見ゆれど、明暗の程鮮明ならず、色々の打ち解け姿、何れも〳〵をかしげなり。女の童を庭へ下ろし、蟲籠に露を飼はす、萩薄、女郎花、時に逢ひたる縫模様、四五人ばかり打ち連れて、此所彼所の草叢に、いろ〳〵の籠どもを、手に手に持ちて徘徊つ、瞿麥などの風に遭ひて、いと哀れげなる枝どもを、折り添へて参る樣子、立籠めし霧に隔て、朧に見ゆるぞいと艶なる。折柄吹き來る追風の、さと薫れるは簾近く、磯菜の方もおはするならんと、氏仲は忍びやかに、打ち音なひて歩みよる。未だ前髪のある程なれば、折に觸れ女の中へ、立交り給ふが故、人々見知り参らせて、さのみには驚かれど、寢亂れ姿を恥らひてや、皆々狼狽退り入り、御取次には更科と、十六宵二人立



ち出でたり。氏仲靜かに父君の、のたまひし事傳ふれば、更科は謹みて、仰の趣御方へ、申上げんと起ち行く後へ、腰元女が持ち出でし、茶など打ち飲み十六宵に、浮世語をなしながら、氏仲四邊を見回すに、女共が最前の、打解け姿は見る人も、あらじと心の緩びしにて、氣高く住みたる氣色有樣、内君とても是には爭で、勝るべきなど思ふ中、又更科が出で來り、御返辭を聞ゆれば、氏仲は取り急ぎ、巽の館へ立ち歸るに、雨戸殘らず開け渡し、遙向ふに女數多、集りたるが幽に見ゆ。これは昨夜紫が、見捨て難く思したる、花どもの吹き亂され、哀れに凋れ伏したるを、打ち眺めておはするなりけり。氏仲は此方の緣に、待間程なく光氏の、出で來たらせ給ひければ、容を正し靜やかに、暴風にだにも驚くは、餘りに心の若々しと、思ひながらに鎭まりし、後にも胸は騷がれしが、今朝訪ひ給ひし有難さに、寡も自から穩に、なり侍りぬと磯菜の返辭を、申し述ぶれば光氏點頭、「賢き性質にありながら、年には似合はずいと幼なし、さは言ひながら女ばかり、物恐しき夜の樣子、然思ひしも道理なり。我も其所此所うち回らん、夫れに待ちて供せよ」と、言ひ流して一間に入り、鏡に對ひ鬢の亂を、搔上げなんどさせながら、紫に打ち向ひ、「雲井之丞が朝明の姿、一際勝れて清げなり。まだ前髪のある中は、女めかしきものなれど、彼は左迄に媚かずと、思ふも親の慾目かと、鏡に映る我顏と、心に

見比べ給ふなるべし。頓て衣服を更めて、氏仲を引き連れつゝ、磯菜が住居を初めとし、尼の空衣村荻を、住まする部屋をも差覗き、夫より直に乾に通り、朝霧の方を見るに、宗入よりも侍士を、あまた付けしが其中の、老臣立つ者は見えず、唯下仕とも云ふべき男、草の中に交りてあり。此所にも又女の童の、なかしげなるが庭へ下り、笑ひなどして立ち騒ぐは、朝霧が心を留め、植ゑさせおきし龍膽朝顔、心地よげに昨日まで、這ひ交りたる籬垣も散り亂れしを左右して、引き起さんと爲る樣子なり。朝霧は野分の風、物の哀れに覺えければ、其心を慰めん、爲にやあらん小高き座敷の、端近に茵を布かせ、例のなかしき琴を執り、搔弄りつゝ荒れたる園を、靜に眺めて居たりしが、君の渡らせ給ふと云ふ、報知を聞くより萎えばめる、姿を更め衣紋を正し、手をつかへて迎へる樣子、今まで打ち解け居たりしとは、更に別の人の如し。光氏も其の樣子を打見、他々の女ども、怖ぢ惑ひしには引き變り、驚きたりし色目も見えず、流石は負けじ魂の、宗入が娘ぞと、心に思ひ打ち通れば、朝霧は端の方に、身を謙遜り謹みて、「明石に育ち浦風の、暴きに馴れし妾さへ、恐しかりし夜の樣子、都の外は知ろし召さぬ、紫の上を始め、姫君の御機嫌は、如何と唯今此方より、御使と存ぜし所、世に有り難き御訪問、是へ渡らせ給ひしにて、伺はず共皆々樣、御機嫌ようおはするは、推測られてお嬉しや、



雲井の君は見上げまする。度毎に御成人、この程は御學問、ばかりではなく御武藝も、御上達と申す事、恐れながら薩刀小太刀の、御指南を願ひたし」と、野分の風には取りても付かぬ、事迄仔細に云ひ並べ、悠々として手づから茶など、點てゝ侑め參らすれば、光氏は風の騒ぎを、問はんと思ひし調子の狂ひ、ありあふ琴を少し調べ、「察しの通り紫は、ことない驚き明石姫は、思ひの外に怖ぢもせず、我に似たらば云ひ甲斐なからん、播磨の祖父が氣性を受けてや、雷も地震も左迄に思はず、先づ是が一安堵。さて此館も定めて損ぜし、所もあらん明日は早々、修繕を言付くべし」と、一つ二つ物語り、隙を求めて又こそと、立ち歸り給ひければ、朝霧心惱しげに、「身にぞしむ荻の葉過ぐる風の音」獨語ちて見送りけり。又玉葛は恐しと、思ひ明して疲れしかば、何時の程にか熟睡みて、思ひの外に寢過して、今ぞ鏡に打對ひ、漱ひなど爲る程なりける。光氏は氏仲ばかり、供に從へ音もせで、忍びやかに入り給ふ。屏風なども疊み寄せ、物締氣無く引き散らし、埒も無くなりたるに、玉葛が粧はぬ、姿ばかりは鮮明に、物清げなる樣子なるが、日の華やかにさし出でたれば、殘る隈なく見遣らるゝに、光氏は不圖其昔、五條に宿り苅萱の、尼に逢ひたる朝朗、締氣無りし黄昏が、姿を今見る心地して、常よりもいと親しく、例の風の事なんど、懇に訪ひ給へども、玉葛は何やらん、物鬱陶しき風情にて、

「心憂き身に侍れば、今宵の風にも誘はれて、何所へぞ行きたうなりました」と、無情いふにいとよく笑ひ、「風につきて行かんとは、扨輕々しき事にてあり。併し飛び舞ふ塵だにも、終には止る處あり、風につきて行かんとは、心に願ひある故か」と、尋れ給へば玉葛は、はつと驚き言ふまじき、事を思はず聞えしと、笑に紛らし打ち赧めし、顏は譬はゞ酸漿とか、云ふ物のやうに見え、肥滿なるが美くしゝ、氏仲は一間二間、隔てし此方に扣へ居て、袖の香なんどを相手とし、物語しておはしゝが、父の笑ふ聲するを、何心なく差覗くに其間は遠けれど、昨夜の風に、衝立障子の、類も取りて片寄せたれば、彼方までいとよく見ゆ。嗚呼怪し、腹こそ異れ明石姫も、彼の玉葛も同じ御胤、姫を大事と傳き給ふに、打つて變りて玉葛をば、側室なんどを待遇ふ如く、戯れがましき事も聞え、心安げの御有樣、生れし時より人に預け、大人になる迄逢ひ給はず、夫故親子の人情は、互に疎くなり給ふか、心得難き事にこそと、心の中に實の姉に、あらざることを大凡察し、いと細やかに玉葛が、有樣に目を留むるに、父君にも妹にも、似たる所は更に無し、さりながら艷美にて、昨日眺めし霞の間の、櫻の花には劣りたれど、八重山吹の咲き亂れ、露重げなる夕榮を、不圖思ひ出で野分の時には、打合はざる比へ事と、心に笑ひ一人點頭、素知らぬ樣子しておはしけり、

# 偐紫田舍源氏第三十六編 終



## 偐紫田舍源氏第三十七編序

初午の鰤魚、鯛を見くだし、節分の赤鰯、鮃をあざ笑ふ。吹革祭に乳柑子を、投いたる例の絶えてなければ、蜜柑は我物顔に誇り、長芋の品たかきも、かつぐべき衣なければ、後の月には家芋の、下座にこそ着くべけれ。是等の類は時々節々、自然に得る勢ひにて、常の位にかゝはらず、これを思ふに大晦の、はや近づきて松や〳〵、竹や〳〵のせはしなき、聲にかはりて一夜明くれば、扇々白酒〳〵、一枚絵草雙子と、呼ぶのを聞けば心も春めく、其折にこそ拙作を、見給ふ人もまれにはあるらめ。是初午の鰤魚にて、書籍の鯛にまさるは少時、それを近年彫だに揃へば。菊咲く頃から春の新板、おくれたは又おくれたなり、櫻が、散つても賣出す、さなきだに興もなき、長物語の此絵草紙、かくまで時節をわきまへずば、三月の菰莚、買ひ給ふ人更になく、作者も七月毛氈の色揚の、請とりにて、賴人のないやうになりなば、節分過の赤鰯、齒ぎしり嚙んでも田作にだに、およばぬ廢物となるべし。

柳亭種彦記

# 修紫田舍源氏第三十七編

此の玉葛が住居の續き、花郷の居る方へ、光氏夫れより渡り給ふ。今朝は朝寒なりければ、暑きほどより裁縫の、手業をするには心安き、故にやあらん年長し、女多く花郷の、前に集り種々の、美しき衣引き散し、裁物に精を入るゝ。又彼方には細櫃の、樣なる物に綿を引きかけ、撮み延ばしなんどする、まだ若き女も見ゆ。此頃は未だ塗桶と、稱ふる物は無かりしなるべし。光氏は邊を見廻し、「來月節句に氏仲が、室町へ出仕の時、着せんとての用意か」と、問へば花郷會釋して、「仰の通りに侍るなり、三月には花の宴、九月にもまた菊の宴、一入に晴がましき、御遊の折なれば、今樣色の珍しきが、宜らうやうに存じまして、」「オ、よう氣が付いたが惜しい事には、今年は左樣の遊はあるまい、室町の花園も、斯く吹き散らして培ひ植ゑ、菊も大方打亂れ、眺むる花も咲き出でぬに、何事をかし給はん。扨凄じき秋なり」など、冒ひつゝ件の清らなる、衣の多きを細に見、斯樣の事は紫の、住居の樣子にも劣らじと、心に思ひ尙つくゞ、目を注むれば其中に、松の綠の高砂染、當世人の專ら好め、殊になかしき綾のあり。これは我へ贈らんとの、用意ならんと點頭きながら、さらぬ風情に手に



取り上げ、「これも雲井に着せ給ふか、若き人には似合ふべし、斯いふ物を着る年に、吁今一度たち歸らば、嬉しかるべし」なんどとて、夫より直に巽の館へ、歸らせ給へば氏仲は、暇を乞うて立出でしが、昨夜一夜眠らざる、其上に又日更るまで、いと氣づまりなる供をなし、草臥し事大方ならず、打休まんと思ひしかど、明石姫は如何にかと、心にかゝり彼處へ行くに、常なる一間に君は見えず、菫野急ぎ出で迎へ「よう御來遊ばした、昨夜の野分の荒々しさ、姫君樣は如何であつたと、お案じなされて夫故の、おいでと推量致したに、確に違は御坐りますまい。風が恐いと怖ぢさせ給ひ、お草臥で御寢なつて、今朝は頓と御起ならず、樣々お瞞し申したら、やう〳〵に御機嫌直り、母樣の御見舞に、行かうとあつて先刻、彼方へお渡り遊ばして」と、聞き掛けて氏仲點頭き「さこそあらうめと推量り、昨夜參らんと思ひしかど、小毬がいと心苦しう、覺えし樣子も見棄てがたく、彼處にて夜を明したり。さて問ふべきは姫が常々、大事に守る雛の御殿に、皆夜の風は當てたるか、何ぢや」と言ひて、微笑めば、菫野はじめ有合ふ女、みな一時に笑ひ出し、「扇の風が當つてさへ、アレ何が飛ぶこれが落ちると、姫君樣は手を當てる、やうにお厭ひなさる御殿、どう障子を閉て込めても、隙間の風に吹き亂され、埒も無うなりました、斯うして置いては御機嫌が、悪からうとて皆寄つて、その荒御殿の修繕に、困つ

て只今居ります」と、物語る中氏仲は、何か俄に思ひ出し、「其方達の使ふ硯が、あるなら一寸貸して癸れ」「はい」と答へて腰元女、明石姫の御厨子より、紙を一卷取下し、硯の蓋にそれを載せ、差出すを打見やり、「こは紫の薄葉か、其は餘りに結構過ぎる、戯書ぢや何是には、及ばぬ事」と氏仲が、云ふは末々室町の、内君となる明石の硯、ことわりもせず我儘に、用ふは憚るべきをぞと、心に思ふ故にてあり。されども外には使ふべき、硯も無ければ熟々と、思ひ返して末はともあれ、今は現在妹にて、實の母は山名の娘、遠慮は要じと心をとゞめ、墨押摺りて筆の先、見つゝ細かに書きければ、女共は床しがり、「お書を物の枝につけるは、紙の色との取合に、心を用ふるものとやら、吁何が宜からう」と、云ふそばから一人の腰元、「これがどうやら宜さうな」と、差出すを又一人が見て、「吹き亂れたるそれは刈萱、紫の紙には似合はぬ、薄の方が武藏野に、緣があつて宜い」などと、立ち騷ぐを氏仲止め、「手前達は扨々物識、左樣細には己は知らぬ、さりながら此文は、何の枝にも付けずと宜い」と、斯樣な若き人々には、殊更言葉少なにて、常の人とはかはりて氣高く、靜に又も書き給ひ、誰をか使に遣らんとて、打案じ給へる樣、只ならず見えければ、彼の若き腰元ども、いよ〳〵文を床しがり、菫野が目顔にて、留めても留らずさし覗けば、氏仲心にいと可笑しく、「見度ば見よ」と投げ遣り給ふ。文



は此頃都にて、名代の書肆平樂寺と、まんぢうやと云へる二軒へ、注文し給ふ書附にて、女どもは見れども〳〵、唐本の外題故、一字も讀めず呆れ居る、斯かる折に姫君の、歸らせ給ふと打そよめき、氏仲が居る次の間に、茵を敷き小屏風を、引き廻はしなんどする、程なく例の愛らしき、聲の此方へ聞えしかば、昨夜見つる花の顏と、此の莟をまづ見比べんと、思へば常の溫和き、振舞には引き變り、氏仲は徐々と、間の襖を細目に明け、さし覗きて見給ふに、明石姫の居る處と、その間は近けれども、傅の女ども、邊に大勢居繞りたれば、細かには目屆かず、薄紫の帷子に、振下髮は打ち廣ごり、取り上げたるはいと小さく、唐輪に結びし其の容態、いはん方なく美しゝ。此頃迄も雛事の、相手などして遊びしが、暫時の間に見增りし、況て盛は如何ならん。彼の先々に見たる花、彼をば櫻夫をば山吹、是をば藤の花とや云はん。小高き岸より咲きかゝり、風に靡きし嬾さは、織くかよわき姿に似たらん。實の一つだに無き花を、御胤と披露し給ひしは、心得難き事ながら、櫻にそひて藤を擧げ、明暮眺めておはします、果報いみじき父君が、何とて我をば花鄕に、預けて却つて母君と、申し上ぐべき紫の、上とは隔て給ふかと、心の不審は晴れざりけり。(野分の卷終)

(みゆきの卷)花も紅葉もなき頃なれど、冬枯の氣色も亦、をかしからんと義植公、嵯峨野をはじめ

大井川、嵐山の邊り迄、遊覽あるべき催しあり。既に其日に成りければ、いざや御出の樣を見んと、京中の人騷ぎ立ち、其道々には出茶屋掛茶屋、隙間もなく押並び、機敷をかけぬばかりなり。彼の六條の館よりも、忍びて出づる人多かり。今日は常の遊覽の、樣とは變り人々の、裝束も美麗しく、花を染め紅葉を摺りし、大紋素袍の袖を列れ、國司に至るまで、殘る人更になく、御供に加はらざるは、唯光氏一人なり。頃は師走の半にて、雪些か打散りしが、程なく空の麗かに、晴れたる氣色は春に似たり。扨玉葛も光氏が、稀の事なり行きて見よと、勸めに隨ひ立ち出づるに、春之助と宮城とを、供の中に打交ぜたり。これは昔心易く、仕ひ馴れたるのみにもあらず、春之助は室町の、式日には必ず參り、昵近は更にも言はず、稀々に出仕する、外樣の武士の面まで、よく見覺えしと宮城より、玉葛かれて聞きしかば、彼は誰此は誰と、彼に問はん爲にてあり。素より人目を憚れば、被衣目深に顏を隱し、とある出茶屋の莚を借り、彼の御供の人々が、我劣らじと挑み顏なる、其の有樣を見る內に、御乘物の近づきたり。右左の戸を半ば開き、いと靜やかに練り行けば、御顏もいとよく見ゆ。さはあるべき事ながら、其の氣高さ麗しさ、他に類へん人はなし。御側近き夫彼の、名を一々に春之助に、尋ね問ひて人知れず、我父に目を注けて、見るに物清げにて綺麗しう、實に執權の位備はり、人



人に比ぶれば、勝れたれども唯人なり、御乘物の中より外に、目の移るべき方はなし。若殿輩も夥なれば、常には容姿の好きもあらんが、皆消えかへりて見る陰なきは、室町君の比類なう、おはします故にてあり。御顏を細かに言はゞ、光氏によく肖させ給ひ、思ひ做しにや今少し、美しう位高う、威は備はりておはしながら、稜々しき處なく、悠然と見え給へり。總て貴人は物清げに、尋常の人とは事變り、上品なるものとのみ、玉葛は打心得、今日まで居たるは光氏氏仲、二人に目馴れし故なるを、今樣々の人を見るに、義植公の御艶麗に、氣壓れたるかは知らざれど、同じ目鼻と思はれず、不具に近く見ゆるもあり、正尙も居給へり、君を月に譬へなば螢ばかりの光はありて、世の人よりは目に立つめり。彼の香壽丸の御傅役、一色の氾廉も、御供に從へり。彼は素より重々しく、苦みて見ゆる男なれば、今日の曠衣の華やかに、出立ちたるにとり合はず、色黑く髯がちに、見えて假にも女に心を、懸くべき樣は無かりけり。夫れ武士は弓馬の稽古に、夏の日にさへ面を晒すは、此の氾廉に限るべからず。館の女は廣き所に、住ひて日の目もろくゝ見ず、其上に磨きたて、紅白粉に裝ひし、顏の色に日焦せし、武士の面の爭でか及ばん、夫を思ひ比ぶるは、道理更に聞えねど、若き心に玉葛は、何れも〳〵見既しけり。兎角する間に御供の、僕まで皆行き過ぎて、四過も靜になりける時、宮

城に向ひ玉葛が、聲を潜めて言ひけるは、「去りし頃より光氏君、度々妾へ仰せには、室町君の御理髪の、事を關かる女三人、今は二人で一人足らぬ、これは氏ある者の娘か、又然なくとも久しく御側に、仕へ馴れて漸々に、出世したる者でなければ、勤めさせ給はぬ掟、折惡しく其役に、採用らるゝ女もなし。其方は上る氣は無いか、御所の樣を見習へば、起居振舞上品に、成るものぢやとて御勸、有難いことながら、田舎育の見苦しい、此の有樣で宮仕、及びもないとその心の、今迄は無かりしが　御所君を見上げたら、何か上がつて見たい樣な、御親みを受けるといふ、御奉公の筋でも無ければ、私の樣な不束者でも、お側へ出られ樣かと、物語る折春之助、膝行出でゝ手をつかへ、はや御立と勸むるにぞ「夫なら後は道すがら、話さうから宮城は側へ、其餘の者は少し後へ、引き退つて供しや」と、差圖をしつゝ玉葛は、忍びやかにぞ歸りける。斯くて其日義植公は、嵯峨野にしばし駕籠を留め、物淋しげなる枯野の景色を、打眺めておはせしが豫てよりして大井川の、岸近く幕を打ち、休息給ふべき處を、設け置きしと聞し召し、頓て夫へおはし着き、御供の人々に、酒肴を賜ひければ、此は有り難しと始の程は、謹みて飲みたりしが、次第〳〵に打亂れ、ふかく醉ひし若殿輩は、御前を退り出で、大井川の岸に臨み、打くつろいで遊びしが、一人の小小姓誤つて、手に持つ扇を水面へ、落すと等



しく逆巻く浪に、浮きつ沈みつ流るゝが、いと面白くて又一人、わざと扇を打ち入るゝを、義植公遙に見給ひ、是はをかしき遊戯なり、夫々とのたまふにぞ、供奉の面々我も〳〵と、投げ入るる扇の色合、青きあり黄なるあり、筏士あらば水上の、嵐を問はん風情にて、興あること大方ならず、今に至りて屏風の畫、衣の模樣なんどに迄、扇流しの形あるは、是より起りし其證據、扇流しと云ふ地名、大井川に今なほあり。斯かる處へ光氏より、酒果物を參らせらるゝ、使の者の謹みて、兼ては供奉と存ぜし處、俄に風邪の心地にて、心に任せぬ由を述ぶる　義植公聞し召し、誰が投げたりし扇にか、岩に夾まれ水に落ちず、柴に雉をつけし形た、描きたるがありければ、取上げ給ふ其端に、「雲深き跡を尋れよ立つ雉の」これは昔芹川の、御幸の事に擬らへられ、今日光氏の供せざるを、殘り多しとのたまふなるべし。其頃ほひの事を記しゝ、文も稀には傳はれども、聞き誤りし事もやあらんと、委しくは爰に云はず。次の日に光氏より、玉葛へ文のあり、如何なる事ぞと打見るに、昨日は途中に室町君を、親しく見上げ給ひつらん、宮仕し給へと、兼て勸めし我が言葉に、今こそ從ひ給はめなど、打解けずまた固からず、細やかに書き給へり。可笑しの仰せと思ひながら、又我心の裡を能く、推しはからせたまひしと、人知れず微笑れ、御返辭は言短に、「雪散る空の朝曇、明暸に光も見えわかず、

海人の子なれど今を盛の、花の波間を分けんのは、いと覺束なきことにこそ」と書きたる文を使の者、持て歸りたりければ、光氏急ぎ打披き、紫にも見せたまひ、「御所の御理髮の事をあづかる、女一人欠けたる間、玉葛に上らずや」と、勸誘して置いたる故、其身を蜑の子と言ひなし、花の御所の宮仕は、覺束なしと聞えしなり。彼は生れの嬋妍なれば、御寢褥をも布かせんと、初の程は思ひしかど、磯菜を曩に我方より、參らせ置きて重れ〴〵は、人の思はん手前も恥かし。然ればとて又高直が、娘と押し晴れいはんには、富世の前に憚あり。玉葛も其等の事に、心附き居る樣なれば、言ひ出しても得心は、せまじとさま〴〵打案じ、扨こそ夫とは事變りし、御理髮の役を勸めしが、此の返書の趣きでは、夫をも否と云ふにはあるまじ。さて夫彼の遠慮なき、若き女は御所君を、微になりと見上ぐれば、何してなりと御奉公に、上りたいと云はぬは無い」と、のたまへば「オヤ否よ、假令どれ程美しい、君ぢやと云うても女の口から、お側へ出度と氣を揉むとは、餘り出過ぎて自惚な」と、莞爾笑ふ紫の、顏を眺めて、「さう云やるな、其方とても見上げたら、何な心にならうも知れぬ」と、戯言に打紛らし、先づ其事は夫ぎりに、程なく年の暮なれば、何くれと事忙しく、又初春は式日多く、暇のなくて玉葛の、事は棄て置き給ひしが、早や正月も末となり、少し心も長閑なるに、就けつゝ光氏また彼



が、事を取り出て熟々思ふに、打ち向ひては若やかながら、早や玉葛は二十歳も越えぬ、室町へ差上げんに、白齒の儘は似合ふまじ。さればとて又今眉を、拂はせんのも憫然く、まづ鐵漿計り含ませ置き、いよ〳〵其日の定まりし、折に元服せさせんと、初鐵漿の調度道具、準備すべしとのたまひければ、其道の職人ども、我劣らじと細工を勵み、蒔繪切金種々の、清らなるを取り揃へ、座敷も狹しと飾り立つる。是のみならず光氏は、只内々にて濟ますんと、思ふ事迄自から、大層になりもて行くは、常々に其德に服し、敬ふ人の多きが故なり。況てや是は高直へ、此の序に知らさんの、心もあれば事を省かず、嚴重しくせられければ、見る人は目を驚かせり。

扨或日空衣の、尼に光氏會ひ給ひ、密に玉葛が、素性を語りてのたまふやう、「親子の緣は盡きざるものなり、然れば竟には高直が、聞き出さんは必定せり、故に他より洩れざる前に、我此事を言ひ聞けんと、思ふについて此度の、玉葛が鐵漿親に、高直が妻篠清を、招きて賴まん心あり。御身一度早百合が名を、偽りて赤松の、館へ來りしことありしが、年月も經ち姿も變り、見知りたる者あるべからず、今より我が使となり、大儀ながら彼處へ行き、篠清に對面し、我が娘とも確に言はず、玉葛と云ふ不便の女、人知れず養育置き、早や年頃に成りしにより、近きに鐵漿を含ませんと、其の準備は

調ひたり。然るに今の世の習慣、鐵漿親とか云へる者、無くて叶はぬ由を聞けり。其事を取り計ひ、賜はれかしと頼みて呉よ、眞を明せし其上では、玉葛の母は篠清、生ぬ中でも他所ながら、先づ對面を爲させたし」と、事無やかにのたまふにぞ、空衣は畏り、お前を立ちて赤松の、館へ直に赴きけり。暫時あつて空衣尼、六條へ立ち歸り、光氏の前に出で、「仰せの趣篠清に、申し聞かせて君の斯く、思し召し付かせられしも、富世の前樣御覺え、いと目出度に、玉葛樣を、宵からせ參らせたき、御心に侍るべし」と、取り繕ひて聞えしかば篠清は殊の外、歡びながら打案じ、「世に有りがたき事なれば、早速お請も申したけれど、去年の冬より母小毬、惱み劇しう種々に、養生致せど癒らず。高直は日毎の出仕、留守がちに侍れば、妾は館を離れがたし、冠者の君もお心を、痛めさせられ夜晝傍を、離れ給はず御介抱、偽りならぬ是が證、お殘り多や」と懇に、申し譯を致されしと、聞いて光氏吐息をつき、「吁折悪しきを如何にせん、小毬の病氣とは、氏仲にも疾く聞いたり、若き者すら定めなきに、況んや年を積みたる身、今にも亡なば玉葛の、忌服を受くるを知らず顔、作りて居んも本意ならず、彼が世に在る其中に、言ひ聞かするこそ宜からめ」と、心を定め空衣には、暇を賜ひ小毬が、樣子を見んと赤松の、館へ夫より至り給ふ。吁世に類なき容貌好き、君にておはしましゝかば、若き程は美しう、年



加はれば威の備はる、昨日に今日はいよ〳〵光を、添へ給へる心地して、いと珍らしと小毬は、見上ぐるより身の惱みも忘れ、起き返りつゝ脇息に、凭りて弱げに見えながら、物などはよく聞ゆれば、光氏は打微笑み、「左迄に重き事にも非ず、夫れに居る氏仲は、たま〳〵ならでは館へ歸らず、何を云うてもうろ〳〵と、好な書物も取り出でず、御身のことのみ打歎げば、如何やうなる有樣かと、いと覺束なく思ひしが、其の體を見て安堵せり。疾にも見舞ふ筈ながら、室町などへも去り難き、事の無ければ出仕せず、引籠り居て早や仕を、辭したる人と同じ樣、我より遙に年老いて、屈みし腰を杖に伸し、苦しみ乍ら其處此處と、打ち廻るもなきにはあられど、斯う何事も物憂くなり、顔出しするのもむづかしきは、愚に生れし我身の癖、夫故今迄怠りし」と、聞え給へば小毬は、さも嬉しげに顔を上げ、「年の積りの惱みぞと、思へば歎かず驚かず、はや幾月か過ぎたるが、今年となりてはいよ〳〵頼みも、少きやうになり行きて、もう一度も御目には、掛られまいと心細く、人に云はれど鬱々と、其事ばかりは歎きしが、願ひ叶うて今日こそは、命延びぬる心地すれ。若き程は心なく、夫に別れ子を先立て、長命するは何の因果と、人の上にて笑ひしが、今は我身の事となり、少しも早く彼世へ出立ち、それを願ひは願ひながら、冠者の君が此樣に、お愛憐に遊ばして、夜も寢ずに御勞はり、仰せの

通りお學問も、打ち棄て置かれ御心を、騷がせ給ふ有難さに、惜しむに足らぬ此命も、掛け止められて今日迄も、思はず長引き侍る」と、唯泣きに泣き入りて、聲打ち震うぞ哀れなる。此時に氏仲は、小毬が脊を打ち擦り、涙に暮れておはしゝを、光氏は目で止め、昔今の物語、集め聞えて種々に、小毬が氣を慰め、やう〳〵に歎きを止め、「さて當館の主は定めて、繁々是へ參らるべし、斯る序に對面したし、密に聞え知らすべき、事のあれども近頃は、何とやらん疎々しく、絶えて面を對せず」と、仰せを小毬打ち聞いて、室町御所の事繁きや、又私の志、冠者の君ほど深からぬか、偶々ならでは尋れもせず、冠者の君の高直を、いと恨めしと思したる、御景色もありしとやら、始の事は知られども、今は彼方を隔てがましく、待遇すが目に掛りし故、立ち初し名は最早消えぬ、夫では何か我意に誇る、樣に聞えて世の人の、却つてあらぬ事までも、言ひ洩さうと時々に、異見すれども近年は、一廉あつて頑固な、心になりし彼の高直、用ひし樣子は侍らず」と、此の氏仲と贋金の、事と思ひて言ひければ、光氏は打ち笑ひ、「言ひ甲斐もなき子供同士、是も緣ぞと打ち捨てゝ、置かるゝやうに夫れとなく、打掠めしかど膝元へ、引き寄せ置きていと嚴じく、異見されたる由を聞き、彼の初め仄めかせし、事を後悔なしたるなり。何事にも清めと云ふ、事のあなれば取り返へし、雪がんと云ふ心でも、所詮濁り



し末の世に、澄みたる水は得難きを、何時を待ちてか居るならん。今聞ゆべき事ありと、云ひしは其等の事にはあらず、まだ若き程高直が、思はぬ方へ翻しゝ種、其撫子を思ひ違へ、不意に尋れて取り栽ゑたる　其頃は誰が根分けぞと、能くも糺さで明石に雲井、たゞ二本にて我が花園、淋しき故に夫れへ列れ、さまで眺めもせざりしが、如何にしてかは室町の、御耳へ入つたりけん、御理髮の事を司る、其役に召し給へり。彼には仰の事は包み、たゞ此方より差上ぐる、やうに拵へ置きたるが、其事に付き彼女の、年の事など能く問ふに、我子に非ず疑もなき高直が娘なり。先づ其事を內々より、知らせま欲く篠清を、彼女の鐵漿親とか、云ふ者に賴まんと、曩に使をおこせしが、御身の惱みを言立てゝ、我が言葉に從はず。吁折惡しと其事は、まづ差置きて御身の容體、心もとなく來りしが、思ひの外に氣力も確、全快は近に在り、其時愛度篠清を、勸めておこし給はれ」と、聞いて小毬不審しく「夫れは實に侍るか、其樣な筋の者をば、彼處此處と人をやり、細やかに拾ひ集めながら、如何なる事にて夫ばかり、貴方のお子と間違うて、今迄噂もせざりしや、然のたまへば去し年、何とか云へる女に馴れ、子を擧けしが何いふ譯か、又其女がお情を、受けしとやらん高直が、云ひたる事の侍りしが、其時にはいと腹立たしき、事のありしに能くも聞かず、其女の子が御威勢の、あるのを時々承はり、

御子と名告りて出でたるならん」と、聞ゆれば光氏點頭「其女に違ひはあらじ、扨此事は假初に、人には洩し給ふなよ、賤しき女を囲妾と、ずるのは武士の品行ならず、世に知られては我も恥、さる故にこそ氏仲へも。今迄は包みたる、追ては披露の仕方もあらん」と、口堅め給ひけり。高直此夜館に在つて、母の方へ光氏君、渡らせ給ひし由を聞き、彼方には人少く、御茵を參らする、者だにもなかるべし。雲井の君も御供に、來せしならんに御饗應は、如何にすらんと心元なく、酒肴菓子の類を、俄に取り寄せ柏之助、梅之丞等を近く呼び、某彼處へ參りなば、物騒がしき樣ならん、我に代りて然るべく、饗應申せ」と言ひ付くる。折柄當吉走り來り、「雁金樣の御名代、小毬さまの今宵の御樣子、伺ひに參りしに、思ひ掛なく光氏君、久し振にてお目見え致し、下らうと致したを、小毬樣が私を、密に小隆へお呼び遊ばし、今見る通り君のお來で、お話のお相手に、なる人もなく物寂しい、程に此方から迎へに遣つた、樣に見せずに此方へお入來を、お勸め申して來いとの仰せ。光氏樣も貴方に御用が、あるやうなお噂も、ござりました」と云ひければ、高直は小首を傾け、何事の御用かと、打案ぜしが是も亦、思ひ違へて莞爾と笑み、「吁雁金が事に付き、冠者の君が恨がましく、のたまひしが御耳へ入つたる、故にて有らんずらん、母も此世の名殘近く、見えさせ給ふ其中にも、彼が事のみ常々仰



せ、光氏君が惡くからぬ、程に一言添へ給はゞ、夫を否とは言ひ難かるべし。然らば君のお言葉に、從ひ顏にて許しもせんが、母小毬と言合はされ、我に否應言はせじの、御心なれば彼方も意地、斷り方は種々あらん」と、雲井之丞が詫もせず、態と無情待遇すを、いと安からず思ふより、己れが心に己が迷ひ、默然として居たりしが、母の仰せ光氏君の逢はんとあるは棄て置き難く、衣服を改め子供を引き連れ、小毬が部屋近く、別間に御坐を設はせ、光氏を請じつゝ、海の魚山の珍物、さまゞ歡待し參らすれば、盃は彼方へ回り、此方へ流るゝ其中に、はや初夜過にぞなりにける。光氏は珍しく、高直に對面し、昔の事ども思ひ出で、彼の雁金が事に付き、快からぬ事ありしも、差對ひては打ち忘れ、種々の物語、隔てず聞え給ふにぞ、高直も細やかに、御請をなし御杯を、戴きながら少し進み、「當邸は渡らせ給ひし事、疾く承り候へども、召なきに參りなば、却つて御機嫌損ぜんかと、今迄憚り候ふと、云へば光氏打笑ひ、「御機嫌を損ぜしとは、此方からこそいふことなれ、昔に變り近頃は、何か心に物あり顏に、云ふのも承知」と御氣色の、少し變れば彼の事と、察して高直恐れ入り、さし俯向けば光氏重ねて、「初め思ひし事とは違ひ、本意を遂げずなるのも浮世、誰が身の上にもある事なり、夫等の事は打棄てゝ、折々館へ參られよ、今室町の執權にて、重き身ながら他とは變り、心やす

きが昔馴染、餘りに久しく顔をも見せず、斯うは爲さうも無いものと、愚痴な樣ぢやが恨めしう、思はぬでもない高直」と、仰せにいよ〳〵恐れ入り、「御意の如く其の昔は、朝夕お側に侍ひて、失敬をも省みぬ、程に親しくつかへし身が、器量に應ぜぬ今の大役、早く申せば夫れに倦み、彼の是のと暇なく、御機嫌をも伺はれど、斯く人々の尊敬も、君の御恩と云ふ事は、努々忘れは仕らず、はや初老をも越したれば、若き程より氣根も薄く、夫故の怠と、御許を蒙りたし」と、額に汗して蹲る。其時光氏膝を進め、邊りを憚り小聲にて、彼の玉葛が身の上を、仄めかし出で給ひければ、高直驚き大方ならず、「いと哀れに珍らかなる、事にこそ」とて目も打濕み、「只今も申すごとく、君の惠に人數にも、列なるにつけ我子ぞと、彷徨ひ歩るかば家の恥辱と、已に田舎へ下しゝは、尋れとり候が、彼は心の足らざれば、其の頑固さ見苦しさを、見るに尙更今一人は、如何にせしぞと人知れず、只今尋れて居る最中、眞に思ひ掛けず」とて、開いたる口を塞ぎもやらず。さもありなんと光氏は、心に可笑しと思ひながら「昔戀しき物語、その事かの事おもひ出で、立別るゝも苦しけれど、夜は早やいたう更けぬらん、今一度小毬に、逢ひて」と席を立ち給へば、すは御立と人々が、さゞめき渡り昔に增る、御威勢を見るにつけ、小毬は又二葉の上の、御事を思ひ出で、悄々と打ち泣く顔、光氏はつく〴〵見やり、



是が此世の名殘かと、打汐垂れて氏仲を、後に殘して出で給ふ。此序にも雁金の、事をば更にのたまはず、是れ氏仲を侮りしを、快からず思してなり。又高直も御氣色の、なきに差出て娘をとも、云ひ出で難く其事は、睨め競べに今宵も止み、遠侍まで送り參らせ、「直樣これより六條へ、御供とは存ぜしかど、却つて夫れは騷がしく、候はんかと是にてお暇、今宵の無禮の御詫には、別段參上致さん」と、平伏すれば會釋あり、「小毬が惱も日あらず、宜しうならん彼の日には、篠清諸共約束を、違へず渡り給へ」など、機嫌よげに云ひ流し、立歸り給ひければ、館の者ども不審して、光氏君は何事をか、主人に密々のたまひけん、先年斯る事ありて、程なく今の執權職に、成り給ひしが又何ぞ、御吉事のことなるかと、云へば一人が傍より、「否々最早執權の、上には進み給ふべき、御位は無かるべし。宗全如きの謀叛人、またあるやうな事ではないか」と、僻心得して玉葛が、事とは心付かざりけり。高直は篠清に、先づ此事を物語り、心の中に思ふやう、是れは堅田と事換り、吾子なりとて直に迎へ、親がらんのも惡しかるべし。抑君の玉葛を、尋れ給ひし初を思ふに、彼の黃昏は御心に、適ひし樣にてありしかば、それが娘を御寢間の、伽にと內々思しながら、紫の上方々の、思さん事を憚給ひ、御子と披露を爲給ひしが、夫れにてはまた御添臥に、招き給はん便なく、詮方なさに汝の子と、明させ

給ひしものなるか、さすれば敢へて辱なき、事にもあらねど緣に緣を、求めて彼處の御館へは、宮仕を願ふが多し、夫れを思へば彼は幸福、光氏君に其の御心、若しなき時は室町へ、否々これも富世の前の、思さん事も恐れあり。兎にも角にも吾方にて、尋れ出さぬが過なれば、光氏君の御心に、任せて置かんと誰ありて、語らふ人もあらざれば、獨心を定めしは、これ二月の初なり。

斯くて後に光氏は、氏仲を引連れて、玉葛を訪ひ給ひ、「御身に鐵漿を含ませんと、日を選びしが十六日は、彼岸の初吉日なり。幸に小毬も、このほど少し心地よく、鐵漿親には篠清を、日外より賴み置けば、高直も來るべし、御身の事をも密に彼へ、云ひ聞かせて置きつれば、初めて逢ひなば斯樣〳〵、云々に云ふべし」など、細かに教へ給ふにぞ、親と云ふとも斯くばかり、御心付けては給ふまじ、世に有難き事かなと、思ふものから實の親に、逢ふを嬉しと思ひけん、匂ひやかに微笑む顏、氏仲は打視り、野分の朝怪しやと、目を留めしは我ながら、能く推せしと心に可笑しく、彼れ室町の御身近く、出づると聞いて高直は、願ふてもなき幸と、嘸かし心に歡びぬらん。某と雁金が、中を裂きたる意趣晴し、玉葛が心を誘ひ、又妨げして笑はんか、否々假令假にもせよ、今迄は姉と呼び、我には遙かに年增したり。父も秘藏に爲給ふ女、それも騷ぎの端ならん。親こそ惡くけれ雁金には、更に



恨もなきものをと、思ひ返へすは若きに似ず、例の思慮ある君故なり。扨初鐵漿の日になりて、小毬より忍やかに、玉葛へ使あり、櫛の笥など清潔に調へ、上書に「たそごらん」と、書いたる文の添へてあり。光氏も來合ひ給ひ、取敢へず披き見れば、「斯る事には人の忌む、髮を切りたる身なれども、命長きに肖かり給へ。いと珍しき事を聞き、床しくも嬉しくも、思ひに堪へかれ申すになん。君の御氣色よしや惡しや、伺ひて後御披露」と、打震ひ〳〵、いと古代に書きなしたり。「噫痛はしや文書の、昔は上手と云はれし身が、年に添へて斯くばかり、怪しく老い行く者なるか、能くも御手の震ひけり」と、上には笑ひて玉葛に、件の文を見せながら、命あるうち此の孫に、逢はせん事は覺束なしと、思へば心に泣きにけり。磯菜の方より小袖薰物、其外處々より、種々の贈物、優らず劣らず華々し。又紀の内君よりも、唐倭の錦の帶、例の早百合が持て參れり。彼の帶箱の上に添へて、帛紗に包みし物のあり、何心なく光氏は、取上げて披き見るに、鷄の羽の鐵漿筆三本、安藝の宮島名物の、染楊枝一袋、紅白の水引にて、恭しく引結び、短册の添へてあり「七所かれの響や小夜砧」光氏はうち笑ひ、「また紅が贈物、例の同じ筋なる發句、これは就中聞え難し、急がしけれど此の返事は、己れが書かう」と料紙を取り寄せ、「砧かな又砧かな砧かな」「名句であらう」と見せ給へば、玉葛は興さめ顏、「夫は餘

り憫然しく、何か阿呆にした樣な」と、氣の毒がれば、「さう云やんな、其方は委しく知るまいが、是は糺の門守の、娘で夫れは可笑しい女、彼方の好な詞故、とん〳〵拍子に砧を重れ、遣つたら嘸かし歡ばう」と、早百合に渡し給ひけり。此日表の廣間には、大勢集ひ集まれり。是は豫々玉葛が、鐵漿の祝に酒一献、まゐらせたしと光氏より、内々觸れて置きたる故なり。彼の席に列なる中には、玉葛に心を掛けし、夫彼も交るめり。柏之助も此處迄は、許しを受けて來たりけり。扨高直の夫婦には、晝の程は騷しからん、夕暮過ぎて事鎭まる、時分を考へ參るべしと、昨日仰せはありながら、先つ頃珍らかなる、御物語を聞くよりも、頻りに床しく今日の日を、指折り數へて居たりしかば、心急れて日の高きに、篠清を催し立て、直に御館へ罷り出で、參上の由云ひ入るれば、是をも彼の廣間へ通し酒の泉肉の林の、譬へはものかは珍膳佳殽、御歡待の大壯さ、更に言葉に述べ難し。不思議の緣にて御心を、留め給へる辱けなさ、母の不運に引換へて、果報いみじき娘ぞと、思はず涙を落しけり。程なく夜にも入りぬれば、歸る人あり醉狂て、なほ動かずに居るもあり、或は舞ひ或は謠ひ、各々興に入り、ぬれど、高直は只玉葛が、事の心に掛かるが故、盃を手にだに觸れず、御報知を今か〳〵と、奥の方を差覗き、立て見、居て見、待ち居たり。光氏は其心を、察しながらに重々しく、玉葛を待遇して、



いよ〳〵床しがらせんと、態と時刻を延ばし給ひ、亥刻の時計の響きて後、女どもを使とし、奥へ迎へ給ひけり。高直は篠清を、引き連れて靜に通り、向ひの方を打ち見るに、數多の腰元を左右に從へ、玉葛と覺しき娘、正面に坐し居たるが、小袖の縫箔玳瑁の、髮の飾と燈火と、三つの光の輝き合ひ、更に面は見も分からず、今迄床しと思ひたる、心に引き換へ言ひ出でん、言葉も涙差組みつゝ只茫然となし居たり。篠清も何とやらん、心臆して逡巡しが、氣を取り直し膝行寄り、初鐵漿の式作法、事なく終り　其時に、祝儀の盃持て出づるを、次に待ちてや居給ひけん、光氏は出で來り、赤松夫婦に會釋なし、頓て準備の席に着き、「公然だちては我娘、内實にては汝の胤、子の盃を親の戴く、作法はあらじ先づ予が飲み、慮外を爲さん其杯、玉葛に献れよ」と一杯受けて干し給ひ、夫れと指圖に介添が、直に三方高直が、前に直せば發と平伏、「御意をもどかん道理はなし、然らば御許蒙らん」と、盃を受け持つ手の、頻りに震ふは嬉しきにや、又光氏が歡待の、こと〴〵しきに恐れしにやと、他見にはいと見苦しき。玉葛は父の盃、押戴いて恥しき、樣子して是も物言はれば、光氏は又進み出で、「某の娘となり、こゝに居ること高直は、嘸や不審に思ふべし。其故由を語らんと、思へど昔の事よりして言はれば、分らず言へば又、祝儀の席には、忌む事多し」と、仰せに少し顏を上げ、「其儀は重れて承

はらん。扨段々との御心配、お禮を申さん言葉もなし、世に例なき御惠み、只恨しきは此頃まで、何の故にか斯く秘置き御物語りあらざりし」と、嬉しき餘りに愚痴をも取り交ぜ、夜も更けぬれば御暇、給はりて歸りしが、其夜は更に睡られず、篠清に打ち向ひ「御身は親しく玉葛の、傍へよりたれば、思ふまゝに見もしつらん、我は心の改まり、更に面を見窮めれど、容姿も美て清らなる、生れなる故光氏君の、斯く養育きて置かるゝならんと、思へばいよ〳〵床しさ添ひ、如何にもして今一度、靜に逢ひたう思ふなり。遠からぬ中室町御所へ、差上げ給ふの御噂、知つての通り去りし頃、富世の前の御側へ、堅田を差上げ置いたれば、彼の不束な有樣を、玉葛に見られんかと、夫れが今より恥しい。扨何時ぞやの夢判じの、巫女は生手にありし」抔、其事此事云ひ出し、獨歎び居たりしかば、篠清はよき程に、答しながら心の中に、彼の玉葛をも磯菜の方の、樣に待遇ひ給ふべし、さあらん時には富世の前の、御寵愛の又劣る、端とや是もならんかと、一つの苦をぞ求めける。正尙も此夜さり廣間に來たり居たりしが、高直夫婦が奥へ入り、餘りに久しく手間取りければ、樣子こそあらめと、庭へ下立ち障子を隔て、立聞して大に歎び、初よりして姪にはあらじと、推量は爲つれども、高直が娘とは、更に心の附かざりし、今はいよ〳〵心安し、扨此上は室町へ、召さるゝを防げて、手に入れんず



と是よりは、左まで憚る氣色もなく、文など贈り給ひければ、柏之助も仔細を知り、姉とも知らず心をかけ、氏仲までも賴みし事を、深く恥ぢて人々に、顏見らるゝも面目なく、自からに六條の、館へは遠ざかり、暇ある日は室町の、御所へのみ參りしが、富世の前とは同胞なれば、他の武士とは事變り、奥殿迄も御許を、受けて折節立出でけり。扨高直は或時竊に、彼の玉葛が身の上を、富世の前ばかりには、細かに聞え上げ、暫時は外へ洩さじと、包み匿くして有りけるが、口のさがなき浮世人、自然に此事いひ漏し、次第〳〵に噂の高きを、彼のさがなもの堅田が聞いて、富世の前の御側に、柏之助梅之丞、なにかお伽の物語り、申し上げて居る處へ、突然と出來り、「己が父御は今一人、娘を設け給へるなり。お目出度やお目出度や、何いふ譯で光氏樣と、二人で寵愛なさるやら、聞けば是も劣腹、え知れぬ女の子ぢやげな」と、後前構はず云ひければ、内君は可笑しさと、又氣の毒さを取り交ぜて、何とも物をのたまはず。柏之助は苦笑ひ、「君と父との御二方、養育かるべき故あつて、然は爲さて給ふなるべし。扨誰人の云ひしを聞き、つきほも無いに浮々と、云ひ出し給ひしぞ、口數多い女中など、耳に留ればよからじ」と、云ふを押へて、「噫喧し、皆聞いて置きました、御所樣のお理髮の事を、預る役に出らるゝげな、私が急いでこれ此處へ、上りましたもそんなお役を、おつしやり附けて下さるゝ、

事もあろかと思ふたから、下婢さへもいやがる事まで、引取つて働くが、内君様には見えませぬか、一體貴方がお情無い」と恨み掛くれば皆微笑、誰取り上げて挨拶を、する者なければ柏之助、又もや前に進み出で、「そのお役が缺いたなら、某望んで世に出んと、兼々心懸けたるを、御身が願ひて出でんとは、夫りや横道と云ふ物」と、聞いて堅田は打腹立、女の代りに何して男が、出らるゝ者かよい程に、虚言をも吐いて置くのが能い、近江に居ると氣の揉る、事も何も無い物を、彼方が人をお下しなされ、探して置いて今では何かに、付けて人を阿呆にし、餘り輕い取扱、さうなさるが宜ございます」と、手をついては後へずるり、ずるりずるりと膝行退き、白眼と此方を見やりしは、悪くげは無けれど腹立しげに、眦を屹と引き揚げたり。柏之助は斯く云ふに、付けても眞に由なき者を、尋ね出せしと思ふより、吐息を隠してさし俯向く。梅之丞温順く、「下賤の爲る事まで、身に引受けての宮仕、内君様の御目に留らば、よも疎略には思すまじ。然はさりながら性急に、事を爲るのは敗れの元、心を鎭むる其時は、堅き巖も淡雪と、爲るとやらんの譬あり。されば願も遠からず、叶ひ給ふに疑ひなし」と、笑を含んで柔和に、云ふに引き換へ柏之助、「夫れともに又腹立の、止ずは天の岩戸の中へ、引き籠り給ふべし。さすれば世界は常闇に、成らんず」と嘲弄し、お暇願ひ梅之丞、諸共に立ちけ



れば、堅田はほろ〳〵打ち泣きて、「力に思ふ人々さへ、皆愛想無う爲給へど、只々内君様ばかり、御目を懸けて給はるから、夫れを力に御奉公、致しまする」と目を拭ひ、氣輕に立つて忙はしく、下女童抔も、譲り合ひてせぬ事さへ、皆掻取つて立ち走り、彼方此方と惑ひ歩き、心の限り宮仕へ、する暇には御所様の、お側へ出し給はれと、心安げに内君を、種々に責め聞ゆれば、あら淺間しや物言ふ術さへ、知らぬ我身も願みず、如何に思ひて言ふ事ならんと、内君は興覚めて、更に物も言はれ給はず。斯くて或時高直は、富世の前の御前にて、堅田が願ひの事を聞き、いと花やかに打ち笑ひ、何思ひけんお次へ立出で、「近江の娘近江の娘、此方へ來よ」と呼びければ、「おい、」と答へも輕々しく、出で來りて吾體を、投出すやうに坐るを見、高直可笑さ押し隠し、「此頃は見違へる、計りに行儀も正しくなり、御所君の御身近く、仕ふる女中に交はりても、似合はしからぬ人柄ならず、御理髪の望みあらば、など夙くよりも打ち明けて、己れに語らざりしや」と、信實めきて言ひければ、堅田に嬉しさ顔に現はれ、「さう被仰つて下さるを、實は願うて居ましたけれど、内君殿と御所様とは、御夫婦合のことなれば、あれを使うて下されと、つい一口に頼ましやつて、下さつたならば直に埒が明きさうな事と思うて、萬事彼方へ打ち任せ、安堵して居ましたが、玉葛とやら云ふ姉御が、もう其役に成らつし

やるに、定つたと言ふ事を聞き、夢に榮耀榮華をし、面白かつたを胸に手を、置いたで吃驚覺めて仕舞つた、樣な心地で侍ると」、云ふ舌振も爽かにて、いと忙しなく聞き苦し。高直拂と吹き出す、口へ手を當て笑を堪へ、下賤の夫婦と違ひ、斯かる事まで内君の、おん直々に御所樣へ、仰せらるゝ者にはあらず、覺束なきを賴まんより、然いふ望あらんには、先づ人先に願ひ出る、これ捷徑を行く道理、玉葛は光氏君の、御娘におはすれば、やん事なくとも吾も亦、親切に申さんには、聞し召し入らせられぬ、事はあらじと思ふなり。今にても亦申文、その願書を取り綴り、美々しう書きて出されよ、長歌の詞など、其中に取り交ぜしを、御覽ぜんには棄て給はじ、君は一體お仁慈深く、思ひ込みたる人の願ひを、無下にて見過ぐし給はじ」など、いと宜う嚇すは親げなく、賴もしげなく早や言ひても、甲斐なき者と棄てられて、瞞さるゝとは堅田は知らず、莞爾〳〵と打笑ひ、「和歌は怪しくも、何かつゞけ侍りなん、むつかしい字で書く事は、あなたよりして申させ給はゞ、其尾に付いて淨瑠璃の、脇を語る心持、お聲を賴みに致しませう」と、手を押摺りて悅び居たり。屏風などの後にて、立ち聞きしたる腰元は、可笑さ嵩じて死ぬべく覺ゆ、中にも笑ひ早き者は、悄々と退り出で、遠く去きて腹抱へ、内君も御面、赧みてさても見苦しの、彼が生立と思したり。高直頓てお前に出で、「舌早にての高聲は、



よく聞えて候はん、女には無き申文、何事をか書き出でん、是も亦一興なめり、氣の結ぼれて物懼しき、折には近江の娘を見るこそ、萬に紛れて藥なれ」と、たゞ笑柄翫弄物に、据ゑ置きたりけれど、浮世の人は高直が、娘の恥を隱さん爲、わざと斯樣にはした無く、取り待遇ふならんなど、心々に云ひけるとぞ。（御幸の卷終）

# 偐紫田舍源氏第三十七編 終

# 偐紫田舍源氏第三十八編序

延寶四年撰「至來集」定興の句に、「名にも似ず月こそ出れ丸行燈」、といへるは賴政の謠をやつし、名にも似ずと其形を難ぜしなり。又近く安永九年の作「隣壁夜話」の序に「女郎の實と玉子の四角は、無い物と歌ひしに、行燈は丸く四角な五德が、出來重寶といひし云々」と見え、（延寶より安永まで）其間百餘年、暗合の同論あり。今は座敷の行燈は、丸い物のやうに心得、箱火鉢でつかふ五德は、角たる物と定まりしは、專に流行れ、目に馴れし故にてあり。此草紙に光氏が、大將髙を海老の尾の、やうに割りしは龜戸の案じ、初めの程は異な髪と、己れまで思ひしが、繪馬羽子板押繪の類、開帳庭の納物、又吉原の軒燈籠、團扇はもとより煎餅形、悉此姿を寫すに目馴れ、怪しき髪の風ともいはぬは、前にあげたる二箇の器の、論の止みしに是れ同じ、畫の流行せし功なるべし。それにひかれて自然、拙き作も源氏といふ、名にも似ずとの誹りもうすらぎ、愈末まで續かんかと、角なる五德を譬へに假り、我が身勝手を斯の如し。

柳亭種彦誌



# 偐紫田舍源氏第三十八編

是よりは尙室町へ、上り給へと誰々も、頻りに勸めたりければ、玉葛いと胸痛く、親と賴みし人さへも、怪しと思ふ御氣色あり。況してや御所の御身近く、仕へ參らせ思はずなる、若し御詞も掛かりなば、富世の前磯菜の方、それかれ心おき給ひ、はしたなき事出で來んか。又下々の者なんどは、妬み心に善からぬことを、見出し聞き出し笑はんと、打ち擧りて目を付けられなば、兎角に付けて安からぬ、事のみ多くなりぬべきと、まだ若けれど辨別は、早やある年の程なれば、種々思ひ亂るれど、是等の事を打ち掠め、語り交はさん母もなく、心一つに人知れず、物歎かしさぞ重なりける。其中に彌生廿日、小毬は遂に死せぬ。氏仲が悲歎の事ども、赤松の館の騷動、くだ〳〵しければ記さず、推しはかりて見給ふべし。鳥部野の菩提所に、二葉の上正則と、押並べて葬りぬ。さて氏仲は小毬の、剃りたる髪を請ひ受けて、父のさる年開基したる、名双寺に是を埋め、此處にも亦小毬の、墓を築き て夥多の尼を、集めて追善供養を營み、七日七日に當りし日には、鳥部野に廟參なし、其の外は日毎日毎、名双寺にぞ參りける。

是はさて置き肥後の國の郷士、信樂の現太夫は、京に所用のありければ、見物ながら去る頃上り、木屋町の座敷を借り、彼の春之助の弟なる、彌二郎を供に連れ、洛中洛外彼方此方と、毎日遊び歩きしが、七月の末つ方、大井川の方へ行かんと、まづ太秦の藥師に詣で、かたびらが辻を通るに、向うより來る尼のあり。何心なく不圖見るに、姿こそ變りたれ、其昔都に久しく、逗留をしたりし中、三筋町にて馴染を重れし、茂鹽屋の夕浮と、云ひし遊女に疑ひなし。其後に又上りし時、尋れたりしが行方知れず、今不圖彼が面を見て、昔戀しく思ひければ、行くべき方へは行かずして、浮々彼が後に附き、行けば程なく田舎まで、音に聞えし名双寺の、門の中へ入らんとす、堪へ兼れて袖を曳き、「卒爾ながら」と問ひ掛けんと、する時尼は振り返り、「久しかりし現太の殿、御覽の通りの今の姿、名は染園と言ひ侍る、人の聞いては惡しかりなん、夕とも浮ともものたまひそ、澁茶一服參らすべし、此方へ來たらせ給へ」とて、彌二郎をも諸共に、部屋めく處へ入れにけり。已に前にも記しゝ如く、野鄙者の現太夫、更に床しげなき者から、昔物よく吳れしが故、染園は今も忘れず、菓子など出して待遇すは、其の恩を思ひてなるべし。扨四方山の物語、する其間に染園を、彼方此方にて呼びに來たり、又は物など問ひに來る、尼なんどの出入も、繁かりければ氣の毒に、思ひやしけん現太夫に、染園は



打向ひ、「赤松の高直樣の、御母上が當春御死去、御葬所は鳥部野なれど、當寺へも亦別に、御廟所を建てられて、光氏君の御嫡男、氏仲樣は百日の、其間は日毎に御參詣、はや其日數は過ぎたれど、繁御出で遊して、御懇に御讀經、あれ〳〵お聲が聞えます、まだお服の中ぢやとあつて、お月代をも遊ばさず、今日は又高直樣、田舎より呼び取らせ、給ひたる姫君の、御參詣にて御覽の如く、何やら寺は騷しゝ、重れて來らせ給ひなば、書院座敷廣庭など、案内なして見せ申さん」と、云ふを聞いて彌二郎は、現太夫と顔見合せ、少し前へ進み出で、「執權職と仰がれ給ふ、赤松樣の姫君は、どんなものか話の種、御目見えをしたい者、なア申し信樂樣」と、目交を悟り現太夫、「一寸見上げ申せば宜い、昔の交誼取り計ひ、お頼み申す」と染園が、袖に縋りて何やらん、打ち入れたりけん袂の重み、元より心は卑しき性質、莞爾と打笑ひ、「なりさうもないこと乍ら、お姫樣には似合ぬお氣輕、お心安う御出の度、お言葉を下さるれば、先づ〳〵願うて見ませう」と立ち行く後に彌二郎は、邊を見回し聲を低め、「此頃も申した通り、春之助と不和と、云ふにもあられば尋れ行き、玉葛殿の身の落着、いろ〳〵問ひしが吾を疑ひ、彼ののものゝと言聞かせず、賢いやうでも宮城は女、とう〳〵彼をたらし込み、初の程は光氏の、胤と披露し高直の、娘と人もおろ〳〵知るは、まだ此頃の事なりと、委しい話を聞き

置いたる、折も折とて今日の便宜」と、打ち歡べば現太夫、「併し顔を見たばかりは、思ひの種」と云ふのを押へ、「幾人付いて居たりと女、此處は尼寺手にたつ者の、なきこそ幸ひ飛び掛り、搔い抱いて裏門より、走るか假令其事は、叶はぬ迄も見屆けて、置きだにすれば此寺へ、又參詣の道に待ち伏せ、手段は幾何も候」と、囁く處へ柒園は、遽めいて立ち歸り、「お歡びなされませ、逢うて遣らうと御意遊ばし、後刻あれへ」と知らする程なく、腰元どもが付き添ふをも、待たずに先へ輕々しく、堅田はとつかは走り來て、「田舍から來て私に逢はうと、云ひ入れたのは此方衆か、定めて近江の者ぢやらうが、遂ぞ見た事は無い」と、云ひつゝよく〳〵顔さし覗き「此方の鼻の大な人は、栗本の天王の、社務殿に何處やら似てぢや、お前は兄か弟御か、後の鈍栗眼の人は、何も思ひ出されぬ」抔、例の早言べら〳〵と、並べ立てたる近江訛、筑紫人には聞き取れ難く、呆れて物も云はざれば、腰元共は氣の毒がり、はや御歸館と勸め立て、誘ひ入れば現太夫、興醒め顔に投げ首し、「穢げは無けれども、玉葛には似もよらず、其上蓮葉な彼の物言ひ、彌二郎其方が才覺で、飛んだ冗時間かゝせた」と、云ふのを聞いて柒園は、呵々と打ち笑ひ、「夫れなればお前方は、玉葛樣を御存じで、夫かと思ひ逢ひたいと、仰つたのに侍るか、彼方は假令高直樣の、御胤にもせよ光氏君の、姫上なりと持囃せば、彼の樣に輕々しう、



御出は絶えてなし、彼は近江の堅田樣、高直殿も由ない者を、尋ね出したと御後悔、投げやり者に做てござれば、女中衆まで輕蔑めて、居るからお逢ひもなされた」と、語るに愈々力を落し、「夫では到底望みは叶はぬ、夫はさうと高直の、娘を何で光氏が、夫程までに大切に、さるゝであらうと現太夫、問へば彌二郎打ち點頭き、「御合點が行かぬ筈、さて只今は推量違ひ、申し分けのない代り、其事は篇くりと、お咄を致しませう、己れの父彌五六郎は、伊勢の國板島、教具の元は家來、かの教具謀叛を企て、義政公に亡ぼされ、皆滅亡に及びし時、知何にしてかは横雲とか、凌晨とか云ふ娘一人、遁れ出でしが世に零落れ、怪しき者の妻となり、女子を擧げて黄昏と、其名を呼びなし五條の住居、高直の若き程、その女の許へ通ひ、是も亦女の子を、生みたる其子が即ち玉葛、父彌五六が知らるゝ如く、主待遇も教具の、正しく曾孫にてあればなり。扨程なく黄昏は、彼の高直と緣を切り、又光氏に逢ひ馴れしが、母凌晨は光氏を、父の敵の子なるが故、討つて恨を散ぜんと、狙ひ寄りしが本意を遂げず、黄昏ともに一夜に最期、其時の有樣は、見し者無ければ凌晨は所詮及ばぬことと斷め、自害せしとも光氏に、討れたりとも推量の、說のみにして定かならず。彼の黄昏は母に似ず、心の優しかりしかば、責めては彼が追福の、爲にもならんと玉葛を、勸り給ふと云ふ事は、確に聞き留め置いたり」と、始め

終りを物語る。此方の一間に雲井之丞、始終の樣子を立ち聽きて、心に深く打ち驚き、今云ひし凌晨を、實に斬り捨て給ひしなら、玉葛が身に取りては、父君は祖母の讎、假令さなく共謀叛を企て、義政公に擊れたる、敎具が血筋の玉葛、殊には斯る雜人の、今だに心を掛け居る者を、何の故にか室町へ、差上げんとは爲給ふならん。立ち歸りなば父君を、諫めて此事留めんか、否々夫も嗚呼がまし、はて何とせん彼とせんと、手を打ち組みて暫時考へ、夫よ〳〵玉葛へ、不義言ひ掛けて妨し、義植公の御側へ、近寄せざる樣にせば、讒らるゝのは我れ獨り、他に障はさらに無しと、心に問ひ心に答へ、心を遂め定めけり。風の音なひ雁のこゑ、秋も漸々身に染むる、葉月の初となりにけり。玉葛は此頃の、空より心の定まらず、强ちに宮仕を、厭ふと云ふにはあらね共、實の父は光氏君の、思さん事を憚りて、細やかには待遇給はず、右も左も見も知らぬ、人に交はり憂き事の、ありとも語らん人はなしと、思ふは賴む二人とも、位のあれば威も備はり、斯うで彼でと打ち明けて、聞えかぬるが故にして、誰にも深く思はるゝを、願ふが女の情ながら、ただ淺々と御心を、留め給はずに棄て置かれ、靜に隱れ住ひなば、嬉しからんと世の人に、似ぬ身の上を案ずれば、茫然として夕暮の、空の景色の哀れなるを、端近に出で見上げし姿、まだ小毬の服あれば、薄墨色の帷子に、綾もなく縫もなき、黑き帶して常には變り、更に裝ひ飾られど、生れ附きたる麗しさに、色無きも亦能く移り、却つて夫れが華麗なり。斯る處へ氏仲は不圖入り來れり。是も服を脫がざれば、白に淺黃に目立たざる、一重の衣も人品に、引かれて劣らず清らなり。初めの程は實の姉と、思ひし故に隔なく、あそび戯れなんどせしを、今同胞にあらじとて、俄に行儀正しくせんも、何とやらん稜だてば、なほ其時の樣子に變らず、玉葛もいと親しげに、御物語など聞ゆ。今氏仲の來りしは、室町よりして宮仕の、事ないそがせ給ふ事ども、光氏の言傳を、言はん爲にてありければ、先づその由を述べ給ふ。玉葛は靜に打聞き、御返辭つゝましげに、言ひ並ぶる其の氣色、いと懷しげなるにつけ、野分の翌日光氏の、心安げに玉葛に、戯れし事思ひ出で、室町御所より度々の、御催促あるが故、據なく其事を、此方へ仰せ越さるれども、實は手許を放ち給ひ、差し上げんと云ふ御心は、無きより延引なすにやあらん。さある時には氾廉へ、高直が言ひたる事の、圖に當つて夫れ見よと、嘲けられやし給ふらん、兎角己れが不埒者と、なるより他に思案は無しと、思へど邊に人目あり、打ち點頭いて聲を潛め、「其外にもまだ父君の、御言傳もありしかど、是れは人には包むべき、筋にてあれば」と何とやら、事あり顏に邊を靜に、見廻らし給ひければ、腰元どもは心得て、皆々お次へ起ちて行く。心安しと近く進み、「御所君は清らな

る、御姿にておはしませば、御次々の女ども、恐れ多きと知りながら、心を掛けぬは、一人もなし、されば人目に立つばかり、御心に適ふときは、妬なを受けて思はざる、難儀に及ぶ事あらん、兼々に其心して、宮仕し給へ」抔、斯樣の筋を取綴り、光氏が言ひもせぬ、事を語りて試みれば、何と答へもなしやらず、吐息のみして恥かしげに、差し俯向くも美しく、其中に不圖氏仲は、實に父ののたまひし、言傳を思ひ出で、肝心に聞ゆべき、事のありしを忘れたり。扨御服を脱ぎ給ふは、早や此月の廿日頃、其日は障はる事あれば、十三日と定め給へ。親だつ者の某が、許せば更に障りなし、其日には衣服を改め、神に詣づる例なれば、加茂貴船こそ宜からめと、早や其の用意をし給ひぬ。我れも其日は連れ立ちて、參詣せん」と言ひければ、玉葛少し顔をあげ、「そは有難き事なれど、お連れなされて下さつたら、餘りに目立ちませうから、私一人忍びやかに、參るのが宜く侍らん、光氏君の御娘と、人は存じて居ますれば、若し夫れが知れましたら、何で服を受けて居たと、疑受けるも何とやら、恥かしう思はれます」と、答ふるは能く心得しと、感じながらに氏仲打消し、「いや左程に包み給ふもよしなし、忌あり服ある其中は、悲しき中にもまだ少しは、心頼みもあるやうなれど、夫過ぎぬれば力なき、愈々心地せられん」と、甚哀れげに言ひければ、玉葛は目を押し拭ひ、「朝夕お側にお出で遊ば



し、御看病遊ばした、御身でだにも其の其歎御名を聞きしもまだ近頃、一度も御目に掛からずに、直に別となり果てし、妾が心を推して」と、打濕りたる其氣色、常の女が愛敬を、作りたるより艶麗なれど、氏仲は目もやらず、默然として居たりしが、不圖心づき夫よ〳〵、女どもを遠ざけて、此の序にと思ひしを、今の歎きに忘れたり、何とかせんと邊を見廻し、蘭の花の面白く、咲きしを一本切り取つて、玉葛につとさし付け、「我が心こそ是れにてあれ、よく見給へ」と云ひければ、何心なく取らんとするを、なほ其儘に放されば、玉葛無理にもぎ取る袖、氏仲は引き動かし、「（解けて寢よ同じ野邊なる蘭。）露に濕るゝが願ひぞ」と、言ひ掛けられて玉葛は、思ひがけなや恥かしと、思へどそ知らぬ風情して、「（放れたる野邊の露なら濡れもせん、）」斯うより外の御答は、知り侍らじ」と聞ゆれば氏仲少し打ち笑ひ「己れが住居は此續き、同じ野邊でも草の種、別々なれば離れし同然、室町君より御招き、さすれば愈々輕からぬ、御身と思ひ諦めても、兎角心の沈まらぬを、爭でか知ろし召さるべき、さはさりながら言ひ出さば、中々疎み給はんも、佗しきが故心の中に、深く籠ては居たれども、今はた同じ難波なる、身を盡してと思ひ詰め、恥をも忘れ聞ゆるなり。柏之助がさる頃よりの、氣色を定めて見給ひつらん。我をさへ賴みしを、人の上にはいと可笑しと、心の中に笑ひしも、今は我が身の上

となり、思ひ知らるゝ事多し。彼は却つて同胞なるを、聞きしが故に仇心、失せて行末睦まじく、語り暮らすを樂しみに、する樣子なるが淚し。假令情は懸けずとも、哀れとだにも覺ぼせよ」など、いと濃かに聞え知らせ、給ふ事ども多けれど、煩しければ記さず。玉葛も惡からずは、思ひながらに光氏の、聞し召さんも恐ろしく、且つ雁金が手前を憚り、何とも答なし兼ねて、頭痛し胸苦しと、病に托ち奥へ引き入、いとむづかしと思ひたる。氣色を察し氏仲は、斯る序に今少し、聞えまほしく思ふ事、無にもあられど是も座を起ち、「あら心憂き御氣色哉、ひとはな心の戯ならぬ、己が心は自から、思ひ知らせ給ふこと、必ずあらん」と打歎き、歸らんとする向より、宮城は何の心もなく、玉葛の機嫌を聞かんと、浮々として入り來り、氏仲を見て打ち驚き、傍へ退き平伏す。此方も少し會釋して、次の間迄出でけるが、不圖心づき立止り、山吹を呼び出し、「彼へ行きたる女は確か、田舎よりして玉葛に、傅き來りし宮城とか、云へる者には無かりしか」と、尋れ給へば、「仰せの通り、春之助の妹に侍り、若君樣には能うお見識、たゞ今では夫を迎へ、住居する家を戴き、お側には居らぬから、お人をお退け遊ばしたも、存じませずにつか〳〵と、お前へ參り失敬な」と、なほ何やらん山吹が、云ふを氏仲耳にも入れず、「わざ〳〵呼びても逢ひたいところ、彼の女には用のあり、向ひの人なき座敷へおこ



せ」と、仔細ありげにのたまへば、山吹急ぎ仰せの事ども、宮城を招き傳ふるにぞ、何事やらんと恐る恐る、宮城はお前へ立ち出づれば、氏仲是へと近く呼び、「此の二月まで玉葛の、素性を父君我れにさへ、深く隱しておはせしが、高直が娘ぞと、知らせ給ひし其後に、夙く世を去りし其方の父、彌五六郎の義心を始め、春之助がその遺言を、守りし事など荒々とは、語り聞かせ給ひしかど、まだ父君も知ろし召されぬ、事あるやうに覺えたり。春之助の其他に、其方に一人の兄あるべし、名は何と申すぞ」と、仰せに宮城は不審ながら、「彌二郎とて是は國に」、「如何にも殘りてありつらん。扨其方等が筑紫にありし、其時に彼の彌二郎に、語らひよりて玉葛に、心を掛けしは何者ぞ」と、二度問はれて愈々驚き、「玉葛樣も此事は、深く隱しておはすれば、申し上ぐるも憚りあれど、知し召されて御尋れあらせらるゝに左樣の事は、無しと申すも恐れあり。御父君には必ず必ず、仰せ上げられ給はるな」と、彼の信樂現太夫が、其始末を殘りなく、彼に恐れて逃げ上りし、事迄語りたりければ、氏仲は打點頭き「能く包まずに言ひ聞かせし、神妙々々然りながら、兄にも親にも背きし彌二郎、それに何故玉葛は、光氏の娘と披露し、高直が實子ぞと、人の知りしは近頃と、云ふ事を何故語りし」と云はれてはつと顏打ち赧め、畏れ入つてさし俯向く。氏仲少し冒葉を暴らげ、「其事よりして此頃既に、大事に及ぶべ

かりし處、思ひの外なる事ありて、彼の現太夫は呆れ果て、物笑ひとなりて止みぬ。彌二郎が京の旅宿は、聞き置きたるや」とのたまへば、宮城少し面をあげ、「木屋町と申す事は、承はり置きましたれど、現太夫が上りし事は、只今迄は夢にも存ぜず、女の淺い心から、彌二郎に欺かれ、大事のことな漏らしたる、無調法の段々は、申上げん言葉も無し」と、ほろりと泣けば哀れと思ひ、「是さ何も其樣に、氣を痛めるには及ばぬ〳〵、言ひ譯なしと思ひなば、先づ斯く爲よ」と何やらん、稍久しく宮城に囁き、「春之助にも我れ直に、云ひ聞かせて置くべき間、住居へ密に來るやう、云ひ聞かせよ」とのたまひ捨て、急ぎ歸らせ給ひけり。氏仲は直樣に、夫より巽の館へ行き、光氏の前に出で、玉葛が返辭細やかに聞え上ぐ。光氏は打ち聞いて、「室町へ仕ふまつる、事なば彼は敢へて好まず、澁々にこそ返辭をしつらめ、正尙などは下賤の、事迄もよく了解めて、萬に馴れし浮世人、其が心のいと深き、哀れを盡くして言ひ寄りしに、若しや心の移りしかと、思へば心なき樣にて、宮仕なも勸め難し、されど御所君去年の冬、大井川へお出の節、玉葛が密に見上げ、いと愛で度しと思ひし樣子、若き女は仄かにも、見奉れば御側へ、出づるを願はぬ者はなし。彼れも大方其心と、思へば捨てゝも置き難く、今日も其事言ひ遣りし」と、云へば氏仲少し進み「さて玉葛は人の妻と、なるが相應致さんや、又



宮仕がよからんや、先づ當時御寵愛の、比び無きは磯菜の方、內君とても無上き、御覺えにておはすれば、假令何程御所君の、今御心に適ひしとて、彼の方々と立ち並び、候ふ事は難かるべし。のたまふ如く正尙君、いと懇に覺したる、夫れを知りつゝ室町へ、差し上げ給はゞよしお寢間へ召さるゝ奉公ならずとも、何事ありて引き違へ、られたるならんと御心置き、給はんも御兄弟の、御中らひの疎々しく、ならん端にや候ふべき」と、いと溫順〳〵しく、申し給へば光氏思案し、「此答は容易く爲がたし。彼の高直がある故に、己れが心一つにて、取り計はん人にもあらぬを、一色の氾廉さへ、我をこそ恨むなれ。總て人の零落を見ると、捨て置かれぬが己れが癖、夫故由なき人にまで、斯る恨を負ふ事あり。情が返つて仇となり、輕々しきと笑はるべし。玉葛が母はまだ、年いと若くて病に伏し、いと〳〵哀れに云ひ置きし、事ども忘れざりしかば、ある山里に心細く、彼がある由傳へ聞き、高直が尋れ求むる、氣色なければ可憐く、知つての通り迎へ取り、住居も營み物々しく、傅かるゝ故高直も、何とやらん淡しき心に、なりしにやあらんずらん」と、眞僞とり交ぜて、物語りつゝ又云ふやう、「扨玉葛が人品は、宮仕へこそいと宜らめ、今樣姿に婀娜めきたる、樣には見ゆれど流石に賢く、浮とは人の言葉に乘らず、過失はすまじく見ゆ。常々の物言ひは、幼なき樣に聞ゆれど、事ある時に人に

對し、斯樣〳〵斯樣〳〵と、述ぶる言葉は男の如し。御所君も餘りに締無き、女は好み給はれば、御心に適はん」など、のたまふ樣子を氏仲は、熟々見上げ尙父の、心の中を探らんと、いよ〳〵側へ近くより、「年月斯くて玉葛を、養育み給ふ御志の、深きを知らず世の人は、僻心得をするもの多し。既に去る頃一色氾廉、赤松の館へ赴き、玉葛を貰ひ受けんと、おぼめかして云ひたる時、高直は吐息をつき、娘ながら彼が身は、我儘には計ひ難し、光氏君の若し御心、有りて据ゑ置き給へるか、然ある時にはなまじひに、申し出して御承引の、無きのみならず御不興を、蒙るべしと答へし由、當吉が次の間にて、聞きとりて某へ、密に告げし」と言ひければ、光氏は打ち笑ひ、「夫は似合はぬ事にてあり、室町へ差し上ぐる、事だに早や夙く高直に、語りて既に彼も得心、女は幼きその程は、親に從ひ嫁しては夫、老いての後は子を賴む、これ誰々も知る三從、それと違へて親にもあらぬ、己れが心に任せん事、いとあるまじき筋なり」と、答へ給へば又氏仲、「朝霧の方をはじめ、夫れ彼れ年來御惠を、受けたる者のお館に、多くおはせば玉葛を、彼の方々と押し並べ、置かせらるゝも憚りある、事の出で來て棄てさせ給ふ。代りに御所の御理髮、所詮我が物ならじとて、見放ち給ふを人前は、いと賢くも取り扱ひ、給ひしなりと申しを、確に人の語りし」と、聞え上ぐれば高直は、實に〳〵左程に思ひし



なめりと、光氏は心に可笑しく、「さて直ならぬ言ひやうかな、彼は元來推量を、爲過ぐす事の常にあり、身の行ひも近頃は、我意を隱して人前を、飾る事のみ專と、心掛くるに引き比べ、實に至らぬ隈も無く、さて細やかに考へし、今自からさに非ずと、思ひしること現はれん」と、笑ひ給へる御氣色は、潔けれど氏仲は、野分の朝の御素振、如何あらんと疑解けず、光氏これより言葉なく、斯く高直が推量りし、其の圖に落つるはいと口惜し。己が心の清き事、如何にしてかは知らすべき、室町へ差し上ぐるも、未練の殘りし樣ならんが、兎やせん角やと案じけり。

秋の夕風肌寒き、加茂川堤を北へ北へと、彌二郎に勸められ、彼の信樂の現太夫、目的も無くて來たりしが、遠き路にや疲れけん、邊の石に尻打懸け、何かは知らず向ふをのみ、見詰めて急ぐ彌二郎を、引き止めて側へ近付け、「今日晝前より己れ一人、飲み込み顏にて吉事あり、幸ひありとて俄に旅宿を、取方付けさせ日の入りて、稍寂しき此の加茂川原、そゞろ歩くは確に夜の殿にや御身は魅まれけん。先づ〳〵睫毛に唾を塗り、心を鎭め給へよ」と、云へば彌二郎打ち笑ひ、「初めよりして樣子を云はゞ、必ず心はやらせ給ひ、爲損ずる事もやと、己れ一人で目論見たる、仔細と云ふは今日四時頃、妹の宮城が不圖旅宿へ、尋ねて來たと思し召せ、我も少しの用ありて、他所への出がけ、彼方は來掛

け、門の口にて行き逢うて、中へ入られば御存じない筈、其時宮城が申した事を、擬びて聞かせ參らせん。先づ婀娜しく此樣に、小褄をちよつと掻い取つて、私も今は思はぬ出世、昔に變る被衣姿、お前に見せて歡んで、貰ひたいから寄りました。今日は彼の氏仲樣と、玉葛樣の御服ぬぎ、貴船と加茂の御社へ、お參詣遊ばす私もお供、お付の女中は多けれど、御歸掛けに玉葛樣、始めて都へ御出の時、お心安うなされた人に、忍んでお逢ひなされるには、他の人では目口も煩さし。手前行つてくれとの御意、他へは必ず御沙汰なし、申刻頃にお歸館の、お乘物の中は空。加茂の社人の住居へ内々。お殘りなされて男の乘る、目だゝぬ駕籠で人顔の、確に判からぬ時分を考へ、女のお供は私ばかり、僅な人數で竊とお出で、遊ばす處があると云ふは、御不足の無いお身分でも、心遣ひは同じ事、然した大事の御用を聞くも、お幼からお側に居て、お心易い私が冥加と、聞きもせぬ事長たらしく、轉つたのが此方の幸ひ、途中に待ち受け玉葛殿を、引攫ふには上なき便宜、夫れ故旅宿を仕舞はせ申し、伏見までは駕籠の用意、伏見からは船の用意、あなたへは沙汰なしに、手支へもなくぬかりも無く、調べ置きて候ふなり。まだ其上に此の川原の「乞食非人に物取らせ、語らひ置いて若し二人が、手に餘りなば呼子の笛を、相圖に力を助くる筈、さて仕終せなば如何ばかりの、褒美をや賜はらん」と、早掌に



握りし如く。爲たり顔にぞ語りける。素より思慮なき現太夫、大方ならず打ち歡び、「そは屈竟の事にてあり、愈々聞きしに相違なく」と、言ひも切らぬに彌二郎打笑み、「お心遣ひ御無用〳〵、なほ宮城めをたらし込み、戻りの道筋最細かに、聞き置きたれば違ひはあらじ、こなたへ來らせ給へとて、榛の木四五本叢々と、立ちたる邊りに二人は潛まり、待つ間程なく向ふへ乘物、早かいくらみ時なれば、確に見えれど宮城なるべし。被衣姿の女一人、其外侍二三人、甲斐〳〵しげなる者は見えず。「シヤござめれ」と二人は木蔭を、躍り出でゝ道を遮り、「物申す事のあり、其乘物止めよ」と、刀の切羽打ち回はし、仁王立に突立つたる、其勢に恐れしや、附從ふ侍ども、咎めもやらず進みもせず、云ふが儘に乘物かき据ゑ、控へて樣子を伺ふ樣、現太夫はさてこそ我が威に、呑まれしと心傲り、つか〳〵立ち寄り乘物の、戸を押し開き差し込む手先、確と捉へて徐々と、内より出る雲井之丞、是はと驚く現太夫を、筋斗を打たせ磐と投げ、起きんとするを足下に踏へ、莞爾やかに打ち笑ひ、「蟲に等しき身を以て、姉玉葛に心を懸け、狼籍ひろぐ惡戲者、斬つて棄てんな易けれど、今日服脱ぎの歸路に、血を染さんも憚りあり、命は助け得させん」と、のたまふ詞も顔も、いと愛らしきに似もよらず、習ひ覺えし武術の力、現太夫は宛然骨も。碎くるばかりに苦しくて、許させ給へも出でばこそ、只手を合

せ泣き居たり。彌二郎は案に違ひし、此の有樣に恐れながら、流石に一人も逃げがたく、宮城に向ひ大聲上げ、「己れ何の意趣ありて、我を欺き大事の旦那を、辛き目に逢せし」と、立ちよる襟髮かい掴み、被衣をとるは宮城にあらぬ、思ひ掛けなき春之助、いよ〳〵狼狽合圖の呼子を、吹けども〳〵所詮首尾は、爲終せ難きを見て取りけん、乞食共は一人も來たらず。春之助怒の齒を嚙み、「我々ばかりか母上も、玉葛樣の御緣により、光氏君の御扶持に預り、今世を安く過ぎ給ふ、然るに己れたゞ一人、現太夫に加擔して、恐れ多くも姫上を、奪ひ取らんとする横道者、八裂にしても慊たらぬ、奴にはあれど氏仲君の、御仰せが重い故、此度は歸しやる、有難う思ひ居れ」と、ばら〳〵涙に暮れにけり。雲井之丞は現太夫を、彌二郎が側に蹴遣り、「名双寺にて過日頃、彼等が擧動心得難く、宮城に言ひ付け誘はせしに、果して網に耀りし魚、時過ぎたれど放生會、こりや春之助、宮城を今朝ほど遣はしたる、其後より又人をやり、伺はすれば遽しく、旅宿を片付け玉葛を、連れて立ち退く船の用意は、彌二郎が伏見にて、調へ置きしと確に聞く、夫れにて二人を押し返し、再び都へ足向けすなと、汝よく言ひ付けよ」と、駕籠の中なる驛路の鈴、取りて打ち振り給ひければ、夥多の同勢出で來り、「さア立ち居れ」と現太夫、彌二郎二人を中に取込め、警固は則ち春之助、いと嚴重に連れ行くを、打ち見



送りて氏仲は、心靜に乘物に、乘りつゝ館へ歸りけり。

月立ちて九月になりぬ。昔よりして此月は、人の出入を忌みければ、十月許りに玉葛を、室町へ參らすべしと、光氏密に沙汰してけり。義植公も豫てより、聞し召し入れられし、事の無きにも非ざれば、斯く延び〳〵になり行くを、心もとなく思しゝとか、況てや今迄心を盡せし、人々はいと口惜しくて、御所へ上らぬ其先にと、袖の香始め其外にも、玉葛が氣に適ひし樣なる、腰元どもを手懷けて、種々に責むれども、何れも〳〵詮方つき、假令吉野の瀧つ瀨は、手をもて遮り留むるとも、今となりては御媒介、いと〳〵固き事なりと、文だに取次ぐ者のなし。雲井之丞も愁じいなる　事をさる頃打ち出でゝ、如何に思ひて居るやらんと、底の心の苦しき儘、いと懇に後見を、する樣に萬つ持て做し、父の許へ使になど、駈り歩きて其後は、輕らかに嬌かしき、事は假にも聞え給はず。如何にもなして室町の、宮仕へは留めんの、心は失せしに非ざれど、是れは手易く言ひ出でん、事にもあらねば持て鎭め、事の樣をぞ見居たりける。斯くて月の明き夜、玉葛の腰元づとめ、若き女の三四人、緣の端へ立ち出て、外には人もあらざれば、打ちくつろぎつゝ聲潜め、「世に可笑しいは赤松の、若殿達が彼程しげ〳〵、氏仲樣を勸めては、お供でお出でなされたが、此頃は寄り付れず、眞實の御兄弟と、云ふ

が知れたら尙更親しく、なされて今度室町へ、お上りなさるお世話をば、人先へなさる筈」と、云へば側なる一人が搖取り、「其中に罪の重いは、御總領の柏さま、私等迄にも追從して、お心を盡されたは、知つて居るのに手の裏を、返した樣に俄に行儀を、作つて素知らぬお顏つき、あゝしらゝしくなる者か」と、人々寄りて可笑がる、世の俚諺に人事を、云はゞ目代を置けとやらん、庭傳ひに柏之助、何時の程にか入り來り、今も猶忍びやかに、窺ひ〳〵照る月の、餘りに明きを恥らひてや、桂の木の蔭に隱れ、父高直の使として、參りしよしを言ひ入るれば、今さゞめきし陰語、聞かれやせんと女共、恐る〳〵立ち出でゝ、玉葛が居る處より、二間ばかり隔てたる、簾の中へぞ迎へける。早や兄弟と云ふことを、人能く知れば隔つるにも、及ばずながら玉葛は、自ら逢はんも包ましく、山吹をして仰せの趣、如何なる事ぞと伺はすれば、柏之助色代なし、「斯く云へば我家をば誇るに似たれど召し遣ふ侍あまた侍ふに、某撰びに預りて、夜中使に參りしは、人傳ならで聞え知らせ、給はん事にぞ侍るべき。斯く物遠く隔りては、申すも詮なき心地なり、我が身は數にも候はねど、列なる枝、血筋の糸。絶えぬ譬も侍るを、如何に思しておはするならん。いと古めきたる言ひ事ながら、同じ根生の小松ぞと、聞くより此方は賴母しき、ものに思ひて侍るを」と、今人傳を快からず、思ひしさまに見えければ　山



吹は引き入りて、頓て袖の香出で來り、玉葛樣の御意なさるは、仰せ無くとも年頃積る、夫や是やの御物語、聞えまほしきは山々ながら、此頃風邪の心地にて、今日は取り分け起き上り、などする事もいと苦し、夫に斯く迄稜立ちて咎め給ふが中々に、疎ましき心地なん、爲侍る」など取繕ひ、いと忠實ちて傳へければ、柏之助打ち笑ひ、「左程までに憎ましく、思し給はゞ御枕の、屏風の元まで進み入る、事をば許させ給ふまじや、よし〳〵道理を申すのも、却つて心の無きに似たり、扨父高直が申し來せしは、室町御所への御參は、何日の頃にか委しき案内、今日迄も更に聞かず、光氏君に問はせられ、内々にのたまひ知らせ、給ふ樣にと密の願、只何事も人目を憚り、此御館へ出で難く、御日通りにて聞えぬ事なん、本意無きさまに候ふ」など、忍びやかに聞ゆる序、我が身の事をも又取り交ぜ、去りし頃まで某に、いと仂なき振舞ありと、申す者などありし故、斯く疎ましく爲給ふよ、夫は遁れぬ由緣ぞと　努々知らぬ昔の事、今は却つて哀れぞと、御覽じらるゝ筈にてあり。先は今宵の御待遇、表立ちたる晴の方、賓客なみに据ゑ置かれ、給ふが更に心得ず、取散らしたる納戸樣の、所へ密に召し入れて、御身の如く重立ちたる、女中こそは立ち交じる、事をも厭はめ下仕ひ、婢なんどの人々と、打語らはゞ心も長閑く、嬉しからんを種々に、珍らしき世を見る事と、打側目つゝ恨み續け、云ふも

可笑しと袖の香は、すべり入りて斯くなん」と、玉葛に告げければ、少し片頬に笑を含み、「實は兄弟なりける事、知られしとても今俄に、親しくなさんは人聞宜からじ、年頃床しく思ひしを、偶々逢ひ見て心ほど、語はれぬも珍らしき、世なりかし」とて只直ぐよかに、聞え給ふが眩くて、柏之助は默然と、吐息と共に、「雲と見し惑ひも絶えて妹脊山、「吁怨むるも皆己れが、誤りなりとうめきしが、此方へ洩れて聞えけん、「花もなや妹脊の山の惑ひ道、」と口の中にて吟ぜしを、山吹頓て此方へ傳へ、「始めよりして姫上は、御同胞と云ふ事を、知し召しておはすれば、忍び〳〵に兎や角と、仰せありしを花もなき、此身に戀にはよもあらじ、同じ御胤と云ふ事を、誰れが傳へて睦じき、方にやあらんと心の、惑ひしと云ふ此お返辭、自から聞え給はぬは、世を憚らせ給ふ故、自からにお心の、今に解くるは知れた事、深くお案じ遊ばすな」と、執成し言ふも無理ならねば、柏之助打點頭き、「長居せんも何とやら、物むつかしき心地なり。宜し〳〵次第に勤勞積り、重々しくならんには、人も強ち輕蔑まじ」と、言ひ流して起ち上れば、月隈もなくさし登り、空の氣色も艶なるに、秋草すりたる袴のそば、搖い取たるも華やかにて、いと優美に清げなり。雲井之丞の氣色には、立ち並ぶべくもあらねど、世の人に比べては、是もなかしとうら若き、腰元どもは目を留め、光氏君と赤松殿の、擧げ給ひし御子達



は、男も女も打揃ひ、風流やかなも不思議ぞと、密に囁き愛であへり。此夜さり氏仲も、月の冴えて面白きに、庭を其處此處打回り、玉葛が住居の方へ、何心なく來かゝりて、不圖座敷を差し覗けば、柏之助が怨みがましき、事の數々聞ゆるを、袖の香も山吹も、持て飽み居る樣子なり。姉弟と知らざる前は、我れをさへ打ち賴み、心を盡くしたりけるが、今は何をか言ふならむと、小柴垣に立ち隱れ、件の概略聞き取りつゝ、然迄腹立つ事にもあらぬを、稜々しく言ふが故、愈々恥ぢて玉葛は、逢はざるなめり己れが言葉を、添へて對面さすべしと、既に入らむとなしけるが、否待て暫し夫れよりは、後にて寛々玉葛が、心を取りて姉弟の、中睦まじうなる樣に、計らふ方こそ宜からめと、幸ひ人も見咎めねば、密に住居へ立ち歸り、又机に倚り書を繰り披き、寢よとの鐘に枕を取り、打ち微睡しが「若君〳〵申し〳〵」と呼ぶ者あり、誰にかあらむと起き返へり、見れば怪しや一人の法師、枕の頭に手をつかへ「君未だ幼き御程には、御目見えも致したる、名双寺の住職田貫、申し上げ度き事ありて、御眠ぶりを覺まさせし」と、恐れ入つて蹲る。氏仲はいと不審く、「貴僧は大井の館にて、切腹なして果てたりと、人の傳へに聞いたるが、如何にしてかは健康なる、又某には何の用」と、問ひ給へば頭を上げ、「名双寺の尼柒園は、昔己れが由緣の者、君の知ろし召す如く、現太夫に語らはれ、赤松殿の御息

女に、對面の御媒介、それが畢竟人違へに、おはせし故に過失なし、然なき時には騷動の原因、重れて右の筋なる口入、屹度致すべからずと、染園を叱り置き、現太夫彌二郎二人、兵庫よりして又都へ、歸らん催し爲たりし間、風を起し涙を立たせ、陸へは船を寄せさせず、辛き目見せて本國へ、送り歸し候ふ間、御心易う思し召せ。さて又件の彌二郎が、名双寺にて物語りし、玉葛樣の御素性、もれ聞せ給ひしより、よし不義者と云はれても、室町御所へは差し上げずと、お心配は道理ながら、はや世も經てば人も變り、義政公を敵と恨みし、者の血筋と云ふ事は、光氏君の其他に、知つたる者は皆てなく、何の障り候ふまじ。然はさりながら御安心、なされ難く候はゞ、此處に不思議の守護符あり、二つを分けて男女に持たせ、或は丸じて食に交ぜ、食するか若し其事も、遊ばし惡き其時は、影を移せし茶を二人に、飲ませてなりとも奇特は目前、假令今迄仇敵、ほどに背きし中なりとも、忽ち變る魚と水、何れなりと玉葛樣の、御緣は御心任せなり。世に有り難き賢才の、君に向ひて異見がましく、申すも恐れ多けれど、不義者になり給ふのは、勿體なくや候ふべき、義植公と敵同士の、血筋を避けん爲なりと、申す事は只今も、聞へし如くに知る者なし、御父君を始め參らせ、只氏仲が不義なりと、偏に思しとり給はん。又二つには雁金樣の、御心根もいたはしゝ、餘りに道を立て過され、道に背き



し御浮名を、取らせらるるがいと悲しく、御腹立も省りみず、言上致し候ふ」と、二つの守護符を差し出す。氏仲いよ〳〵心得難く、闌の謎々の、句をもて日外玉葛が、心を誘ひし其元は、我より外に天地の、間に知る者なき筈なり。抑御身は如何なる術を、得られて人の胸中を、斯く迄察し給ひしぞ、是に上越す不思議は非じ」と、田貫の顏吃と見れば、ありし容は煙の如く、消えて跡なくなりにけり。是はと驚く我が聲の、耳に入つて目を開けば、是れ一睡の夢にして、丑刻の時計ぞ響きける。茫然として起き上り、不圖枕邊を打見やれば、いと愛らしき一人の少女、斯の夢に見し二つの守を、手に捧げつゝ跪居たり。扨は正夢なりけるかと、斯の守を執り隱し、顏さし覗きよく〳〵見れば、明石姫の御乳の人、堇野の娘なり。由緣も此時心づき、四邊きよろ〳〵、打ち眺め、「私は何して若君樣、此處へ參つて居りました、千鳥と一所に只今まで、部屋に寐んで居た者が、まア何時の間に來た事か」と、投首する折花鄕は、腰元引き連れ入り來り、太う襲はれ遊ばす御樣子、お起し申すも憚りと、お次に宿直の女ども、知らせます故御案じ申し、伺ひに參りました、何ぞ怪しいお夢でも」と、問ひ掛けられて氏仲は、有の儘には言ひ難く、口籠りしが床間に、御曹子牛若の、掛畫のありしが不圖目につき、打ち點頭きつゝ「然れば〳〵、夢は可笑しきものにてあり、鞍馬山に只一人、踏み迷ひしが、丈高さ一

人の山伏、我が行く先へ揺ぎ出で、己は僧正坊にてあり、汝年頃武術の執心、淺からざる故奥儀を傳へん、夫々と下知すれば、數多の小天狗群り來り、木太刀を持つて打ち掛る。心得たりと漸暫く、戰ふうちに時計の車の、軋る音の耳に入り、目覺めて見れば是れも天狗に、掴まれてや氷たりけん、思ひ掛なき由緣が居れり。女どもは知つてか如らずか、是れは明石の乳人の娘、朝霧の方目を掛け給ひ、今迄卽ち坤の、館に居たりと彼が話し、物恐しく思ひし樣子、送り返して執らせよ」と、さもありさうに云ひければ、花鄕始め女ども、辭を揃へ「幾重かく、締つてあるのに此お子は、何して此處へ不思議な」と、打ち連れ皆々歸りしかば、氏仲は夢の中に、田貫が云ひし事、繰り返して案じつゝ、又夜の物引き被ぎぬ。扨又前に說きし如く、柏之助が玉葛の、對面せざるを恨みしは、別に一つの絲由あり。抑此柏之助は、一色多京氾廉と、年頃中の好りしが、先つ頃より玉葛に、互に心を懸けし後は、何とやらん疏々しく、面を合せず過ぎたるも、又高直が娘ぞと、確に素性の知れてより、柏之助が思ひは止み、昔の如く懇に、打ち語らふ故氾廉は、好き幸ひと玉葛の、媒介を別白に、柏之助に賴みしかば、打ち心得て折を見合はせ、父高直に斯々と、聞え出したりしかば、高直暫らく打ち案じ、「香壽君の世を治め、給ふ時には氾廉が、威勢つきて自から。人の用ひも格別なるべし。さすれば婿と呼ばんにも、不足はあらじと思へども、光氏君の室町へ、差し上げ給ふを止むるは、我が力には及び難し、斯く迄君の親切に、待遇ひ給ふは故のある、事にやあらんと打ち任せて置くより外に詮術なし」と、執合はざれば柏之動、再び又思案を變へ、今宵父の使を幸ひ、玉葛に多京が事を、仄めかし出で樣子を見んと、思ひの外に斯の如く遠く隔てゝ置きたる故、いと腹立しく思ひしなり。



扨一色の氾廉は、既に前に記しゝ如く、香壽丸の御母上、立田の前の兄なれば高直にこそは及ばれ、室町にての權臣なり。奥方は賤機とて、遊佐國助が總領娘、紫の上の姉、殊には本腹人柄も、さこそと思ふに引き換へて、其擧動蓮葉者とか、云へる女に異ならず。吝氣深くて假そめの、事にも目を注け耳を敬て夫とも言はせばこそ、口惡く罵りて、女共をばはしたなく、打ち叩きなどせしが、募り〳〵て何時となく、物狂はしくなりしかば、氾廉殆もて倦み、男女の子をも擧けし者を、今更に離別せんは、快らず思ひながら、詮方盡きて出て行かば、行けと口には言はざれど、棄者にして顧みず、氾廉よりは三歲四歲ばかり、年の上にてありければ、伯母君よ伯母御前と、打戲れて名をだに呼ばず、如何にもして事故なく、緣を斷たんと心に思へば、自から面にも、顯はるゝを賤機は、見るに付けつゝ彌增しに、氣を揉みあせり臥し勝にて、心淸しき日とては無し。保養の爲と遊佐の家へ、行きて便

も更にせず、最早是を限りかと、思ひの外に案内もなく、復た歸り來るなど、心狂ぜし故やらん、更に辨別は無かりけり。されば光氏この多京が、玉葛を望む事、疾く知りながら許さぬは、對面こそせれ賤機は、紫が姉にてあり、夫を己が娘に尊しき、玉葛故に押し除くるも、可憐からんと思してなるべし。此氾廉は若き時より、色めかしく打ち亂れし、事は假にも無かりしが、今玉葛が事に就ては、種々心を盡しつゝ、高直主も似合はざる、緣組なりと强ちに、思ひ放ちもし給ふまじ。女は兎角宮仕を、物憂く思ふ由なれば、只此上は光氏君の、御心一つにて、己れが願ひは適はんと、袖の香なんど手馴付け置き、内々の氣色をも、能く聞き知りて媒介の、事を種々責むるなるべし。早や九月も末になりぬ。初霜むら〳〵見え渡り、なかしき朝其處此處より、玉葛への贈物、帶小袖など女ども、手に手に前に持ち出づる。是は近きに室町へ、參り給ふ餞に、事寄せての例の文ども、言ひ合はせたるが如く、落ち合ひて來りしなり。玉葛は執り上げて、文などを見る事も無く、腰元が讀み聞ゆるを、只聞き流すばかりなり。彼の氾廉が贈りしには、「思ひ恃めし日數も早や、二十日ばかりの空の氣色、霜より先に消えかへる心地して、(數ならば命厭はん長月と)」月の經ちなば室町へと、光氏定め置かれしを、聞き置きし故斯く言ひしや、正尙はいと花短に、「云ふに甲斐なく今は早や、別に聞えん方もなき



を、(玉笹の霜をば消しそ花見ても)」いとかじけたる下折の、笹の葉に初霜の、置きしを落さず結びたり。此外にもありしかど、五月蠅ければ書き漏しつ。女どもは是等の文、また繰り返し繰り返し、此紙の色此墨附き、染めたる匂の懷しさ、室町御所へお上りの、後には斯うした事はなし、申さば是がお名殘と、勸められて玉葛は、如何なる心か正尙のみへ、返辭を聊か認めて、「日を厭ふ葵も消たずはなれ霜」ほのかなれども玉葛が、哀れを聞き知る云ひなしを、いと珍しと正尙は、打ち置かで眺めしなるべし。斯く人々の云ひよりて、心を誘へど玉葛は假にも亂れし擧動なし、彼は女の手本とも、なるべき者と光氏も、折々毎に譽めけるとぞ。

# 偐紫田舎源氏第三十八編　大尾

大正二年六月廿日印刷
大正二年六月廿日發兌

日本文藝叢書
（八十四）

不許複製

正價金貳拾錢

校訂者　幸田成行
發行者　東京市神田區鍛冶町八番地　伊東芳次郎
印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　高橋賢治
印刷所　東京市牛込區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市神田區鍛冶町八番地　東亞堂書房
電話本局八八四番
振替東京一七一番

特約發賣元
東京神田表神保町　東京堂
大阪北久寶寺町　福音社
名古屋本町三丁目　川瀬書店
久留米米屋町　菊竹書店

東亞堂書房圖書大賣捌所

東京日本橋至誠堂
同日本橋林平次郎
同日本橋文林堂
同京橋目黑書店
同京橋東海堂
同京橋前川書館
同京橋北隆館
同神田上田屋
同神田勉強堂
同神田武藏屋
同神田二松堂
同神田崇文館
同本郷日本堂
同本郷東堂書店
同本郷森江書店
同小石川鷄聲堂
同本郷若林書店
同都市東枝律書房
同京都市寶文館書店
同神戸市寶文館支店
大阪市前川書店

大阪市杉本書店
名古屋市小澤百架堂
岡山市山陽書籍會社
廣島市友田書店
同積善館支店
熊本市長崎書店
同金書堂
鹿兒島市谷村書店
大分市甲斐書店
博多市積善館支店
長野市西澤書店
松本市水琴堂
長岡市目黑本店
新潟市萬松堂書店
金澤市字都宮書店
秋田市成見書店
弘前市今泉書店
青森市今泉支店
字都宮市內山集英堂
札幌區富貴書店
小樽區白鳥書店
朝鮮京城日韓書房
清國大連大阪屋書房
（外全國名書林）

文學博士
幸田露伴先生校訂

# 日本文藝叢書 全二百卷 新刊目錄

第一卷 曲亭馬琴著 ●椿說弓張月 上編（既刊）
第二卷 湖南文山編 ●新訂通俗三國志 第一（既刊）
第三卷 曲亭馬琴著 ●椿說弓張月 中編（既刊）
第四卷 十返舍一九著 ●東海道中膝栗毛 前編（既刊）
第五卷 著者不詳 ●新訂太平記 第一（既刊）
第六卷 湖南文山編 ●新訂通俗三國志 第二（既刊）
第七卷 近松門左衛門著 ●近松淨瑠璃佳作集 第二（既刊）
第八卷 曲亭馬琴著 ●椿說弓張月（附昔語賀屋庫） 下編（既刊）
第九卷 著者不詳 ●新訂太平記 第二（既刊）
第十卷 十返舍一九著 ●東海道中膝栗毛（附金毘羅參詣膝栗毛） 後編（既刊）
第十一卷 湖南文山編 ●新訂通俗三國志 第三（既刊）
第十二卷 井原西鶴著 ●西鶴佳作集 第一（既刊）
第十三卷 著者不詳 ●新訂太平記 第三（既刊）

每册正價二十錢＊特製美本三十錢
（送費各册四錢）

文學博士
幸田露伴先生校訂

第十四卷 曲亭馬琴著 ●開卷驚奇俠客傳 上編（既刊）
第十五卷 江島其磧著 ●其磧佳作集（前人事蹟通世間子息氣質其他諸物語） 合卷（既刊）
第十六卷 湖南文山編 ●新訂通俗三國志 第四（既刊）
第十七卷 著者不詳 ●新訂太平記 第四（既刊）
第十八卷 著者不詳 ●一休諸國物語 全（既刊）
第十九卷 曲亭馬琴著 ●開卷驚奇俠客傳 中編（既刊）
第二十卷 式亭三馬著 ●浮世風呂 全（既刊）
第廿一卷 湖南文山編 ●新訂通俗三國志 第五（既刊）
第廿二卷 曲亭馬琴著 ●開卷驚奇俠客傳 下編（既刊）
第廿三卷 式亭三馬著 ●浮世床 全（既刊）
第廿四卷 著者不詳 ●新訂太平記 第五（既刊）
第廿五卷 湖南文山編 ●新訂通俗三國志 第六（既刊）

每册正價二十錢＊特製美本三十錢
（送費各册四錢）

●校訂嚴正。裝幀堅美 竪五寸。横三寸 每册三百頁內外●

文學博士
幸田露伴先生校訂

# 日本文藝叢書 全二百卷 新刊目錄

第廿六卷 著者不詳 ◎大岡政談 全 (既刊)
第廿七卷 湖南文山編 ◎新訂通俗三國誌 第七 (既刊)
第廿八卷 著者不詳 ◎續大岡政談 全 (既刊)
第廿九卷 柳亭種彥編 ◎邯鄲諸國物語 前編 (既刊)
第三十卷 柳亭種彥編 ◎邯鄲諸國物語 後編 (既刊)
第卅一卷 瀧亭鯉丈編 ◎八笑人 全 (既刊)
第卅二卷 湖南文山編 ◎新訂通俗三國志(附錄文那歷史地圖) 第八 (既刊)
第卅三卷 曲亭馬琴編 ◎馬琴佳作集 第一 (既刊)
第卅四卷 爲永春水編 ◎義士實傳 いろは文庫 前編 (既刊)
第卅五卷 爲永春水編 ◎義士實傳 いろは文庫 後編 (既刊)
第卅六卷 近松門左衛門著 ◎近松淨瑠璃佳作集 第二 (既刊)
第卅七卷 著作不詳 ◎平家物語 前編 (既刊)
第卅八卷 著作不詳 ◎平家物語 後編 (既刊)

毎冊正價二十錢＊特製美本三十錢
(送費一冊四錢)

文學博士
幸田露伴先生校訂

第卅九卷 曲亭馬琴編 高井蘭山編 ◎新訂水滸傳 第一 (既刊)
第四十卷 井原西鶴著 ◎西鶴佳作集 第二 (既刊)
第四十一卷 清少納言著 兼好法師著 ◎枕草紙・徒然草 合卷 (既刊)
第四十二卷 曲亭馬琴編 高井蘭山編 ◎新訂水滸傳 第二 (既刊)
第四十三卷 著者不詳 ◎保元物語 平治物語 合卷 (既刊)
第四十四卷 曲亭馬琴編 高井蘭山編 ▲新訂水滸傳 第三 (既刊)
第四十五卷 柳亭種彥編 ◎紫侘田舍源氏 第一 (既刊)
第四十六卷 柳亭種彥編 ◎紫侘田舍源氏 第二 (既刊)
第四十七卷 柳亭種彥編 ◎紫侘田舍源氏 第三 (既刊)
第四十八卷 柳亭種彥編 ◎紫侘田舍源氏 第四 (既刊)
第四十九卷 曲亭馬琴編 高井蘭山編 ◎新訂水滸傳 第四 (既刊)
第五十卷 上田秋成著 ◎雨月物語 聽耳猿 青頭巾 合卷 (既刊)

▲第五十一卷以下原稿整理中——續々刊行

●誰れが讀みても趣味深き日本文學の傑作全集●

毎冊正價二十錢＊特製美本三十錢
(送費一冊四錢)

新古講談の粹を萃めたる

# 袖珍講談叢書

◎面白くして爲めになる通俗教育の急先鋒！

第一編 堀部安兵衛 小金井蘆洲師口演（一冊讀切）

第二編 曾我物語 寛政 一龍齋貞山師口演（一冊讀切）

第三編 荒木又右衛門 後日の仇討 錦城齋典山師口演（一冊讀切）

第四編 大川友右衛門 西尾鱗慶師口演（一冊讀切）

第五編 河内山宗俊 故松林伯圓師口演（一冊讀切）

第六編 宮本武藏 寶井馬琴師口演（一冊讀切）

◎汽車中電車中に於ける唯一無二の好讀物！

ロクロースス表紙——ポケット形美裝

正價卅錢。送費各四錢

修養・處世・立志書類

加藤嘯堂先生著 ◎增補修養論 正價貳十錢 送費二錢

文學博士 幸田露伴先生著 ◎努力論 正價壹圓六拾錢 送費十二錢

加藤嘯堂先生 大仕舞先生共著 ◎常識之基礎 正價貳十錢 送費二錢

加藤嘯堂先生著 ◎人格之養成 正價五十錢 送費六錢

哲學博士 ジョン・トッド原著 姫河原無鳴先生譯補 ◎修養立志自修論 正價六十錢 送費八錢

加藤嘯堂先生著 ◎自警錄 正價五十錢 送費八錢

堀内新泉先生著 ◎人格と運命 正價五十錢 送費八錢

堀内新泉先生著 ◎運命之改造 正價六十錢 送費八錢

加藤嘯堂先生著 ◎增補雄辯法 正價七十錢 送費八錢

後藤男爵閣下序
井上泰岳先生編
◎現代名士の活動振り
正價七十錢 送費八錢

德富、加藤、大町、山路、松村五先生序
菊地曉汀先生編
◎現代名士修養百話
正價六十錢 送費八錢

加藤咄堂先生著
◎讀書法
正價九十五錢 送費八錢

『弘道』主筆
足立栗園先生著
◎心身鍛錬養氣法
正價五十五錢 送費八錢

東京血液療院呼吸操練部顧問
熊代彦太郎先生著
◎殺活自在氣合術
正價六十錢 送費八錢

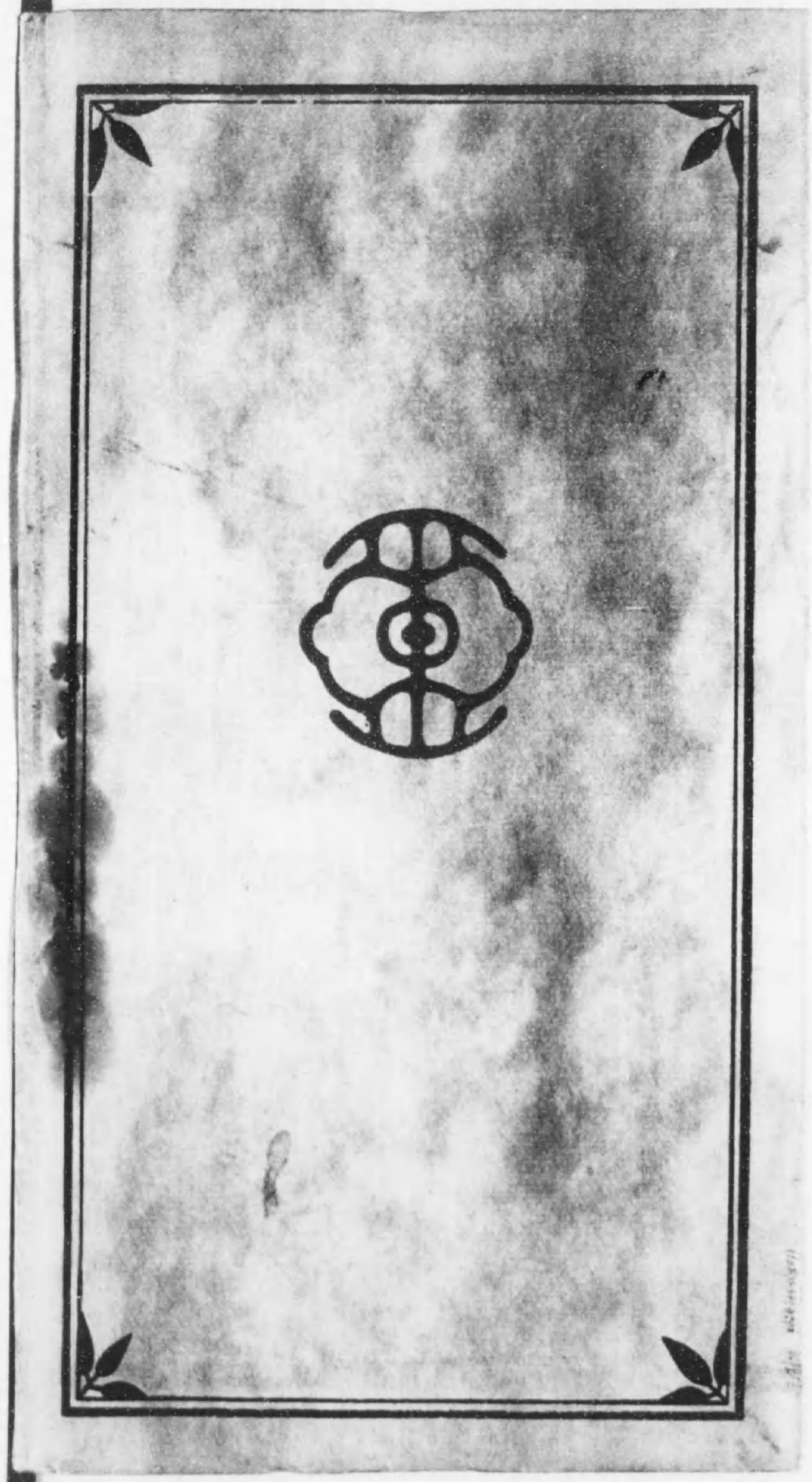
『弘道』主筆
足立栗園先生著
◎膽力之練養
正價五十五錢 送費八錢

東京血液療院呼吸操練部顧問
熊代彦太郎先生著
◎心身鍛錬深呼吸健康法
正價五十五錢 送費八錢

心身健康會會長
檜山鐵心先生著
◎頭腦明快記憶力增進法
正價四十五錢 送費六錢

木村醫學士校閲
漆山又四郎先生著
◎腦力養成法
正價五十錢 送費六錢

加藤咄堂先生著
◎禪學觀
正價七十錢 送費八錢

274
211

終